加藤完治の農民教育思想

―― 国民高等学校運動と満州開拓団 ――

武　田　清　子

1　まえがき
　――このテーマを取り上げる意味――
2　農村更生のための国民高等学校の誕生
　――石黒忠篤を推進力として――
3　加藤完治の教育思想とその方法
　a.　キリスト教から古神道へ
　b.　日本精神鍛錬のための農民道場
4　満州開拓団・青少年義勇軍の課題とその行方
　a.　土地なき農民に土地を
　――満州農業移民を推進したもの――
　b.　農民教育＝国防としての移民
　――開拓団・青少年義勇隊の最期――
5　加藤の農民教育思想の問題
　――国民高等学校運動の史的位置づけ――

1　まえがき

――このテーマをとり上げる意味――

私はさきに田沢義鋪の人間形成論をめぐって，日本の青年団教育における「国民主義」の問題を取上げた。それは，青年，ことに，農村青年のすぐれた指導者であった理想主義的，ローマン主義的ヒューマニスト田沢義鋪を中心として，大正期より昭和の第二次世界大戦にいたる時期に全国の農村青年を動員することに成功した青年団運動において追求されていた「国民主義」の本質とその問題を解決しようとする試みであった。(1) それは自治農村の形成を目ざしつつ，「道の国日本」という皇国主義的国家の形

成を自発的に担う国民像を農村青年のふところに育成しようとする教育運動であった。そして，それは，自由主義，あるいは，日本の精神的土壌から芽生えた土着的ヒューマニズムともいうべき要素を内包していたにもかかわらず，天皇制的国家主義にその援車と目され，利用される結果となった。

本稿においては，田沢義鋪と殆ど世代を同じくするもう一人の農民教育者，加藤完治（1884—）の教育思想，および，その運動を堀り起してみたいと思う。それは，田沢の青年団運動と時期を殆んど同じくしながらも，教育理念や運動の系譜を異にするのであり，青年団運動が内務省，および，文部省を背景に持つ運動であったのと対照して，加藤の場合は，農林省(石黒忠篤）をバックとする国民高等学校運動として，「農村更生」を目的とし，そのための「農民教育」を目ざす運動であった。ことに，昭和初期の農村恐慌以後，全国的に展開された国民高等学校運動は，農民の問題，ことに貧農問題，小作の次三男問題等の受けとめ方において，どういう特質をもつものであったか？　当時，国家主義，国家社会主義，農本主義等の諸団体が体制批判，昭和維新等を目ざして多くの塾（同志の小集団であり，特定の理念に基く若い世代教育の場）をつくって活潑な運動を全国的に展開していたが，そういう思潮の中で国民高等学校運動はどういう位置を占めるものであったか？　それを先ず明らかにする必要がある。

第二に，その中心となった加藤完治は，はじめキリスト教信者であり，後，キリスト教を去って，神道，ことに筧克彦の古神道の熱心な信者となり，その信念に基いて天皇を中心として国民全体がその一身同体を果すことを目ざす「皇国農民」の教育に専念し，農民教育運動の強力な推進力となったのであるが，加藤の思想と実践方法を国民主義を志向する日本の土着的教育思想の一つのタイプとして考察してみたいと思う。

第三に，加藤を中心とする農民教育運動は，満州事変以後，「農民に耕作する土地を」という要請を基礎に満蒙移民運動にと展開し，加藤はその主たる推進力となる。そして，北満の開拓民，青少年義勇隊として農村の貧農，青少年たちが約30万人動員され，加藤らの訓練を受けて渡満し，北

辺鎮護の兵站基地の責任を負わせられながら，最後は無責任な関東軍に見放され，青少年，女，子供を主とする約8万人が悲惨な最期を遂げたのであった。一個の教育思想家の教育方針が国策と手をつないで推進される場合，どういう展開を示すにいたるかの一つの問題がそこに見られると共に，終戦後，この問題が未だ充分な検討を経ることなしに忘却し去られているこの教育運動は，近代日本の歩み，ことに，昭和史の中に冷厳に位置づけ，論じられなくてはならない重要な問題だと思う。

以上のような諸点を綜合して，加藤完治を中心とする農民教育（国民高等学校）運動は，大正，昭和期をつらぬく「国民主義」の追求とその挫折，そこに内包されていた問題をドラマティックに明示するものだと云っていいのではないかと思う。そういう意味で，本稿は近代日本におけるナショナリズム（国家主義と国民主義との間にある）の教育思想の系譜の研究に関する著者の一連の研究の一節（ひとふし）をなすものである。

2　農村更生のための国民高等学校の誕生

——石黒忠篤を推進力として——

日本における国民高等学校の原型は大正4年，山形県立自治講習所とよばれる農民道場として誕生した。それは，当時，山形県の教育主務課長をしていた，内村鑑三の弟子の藤井 武が，明治末年より大正期にかけて内務省を中心として全国的に展開されていた「地方改良運動」（「地方自治は一国の基礎」という）の刺激によるものであろうが，早くより地方自治の振興を唱え，農村に中堅人物が払底していることを嘆いていた折から，那須皓の訳出したホルマンの『国民高等学校と農民文明』[(2)]（大正2年，東京・同志社刊）を読んで非常に共鳴した。そこで藤井は山形県の小田切知事に進言して，デンマークの国民高等学校のような，農家の子弟が学校の農場で働きながら学ぶ方式の学校の開設を計画したのであり，大正天皇即位の大典記念として設置されることとなり，その学校を「山形県立自治講習所」とよぶこととしたのである。これが日本において後に全国各県に設

立されてゆく国民高等学校の嚆矢である。

大正4年に山形県において，こうした県立の自治講習所が誕生したのには，二つの要素がその背景をなしているように思う。第一に，日露戦争後，内務省を中心として全国的に展開されていた「地方改良運動」がある。当時，内務次官一木喜徳郎も発言しているように「一国興衰の本源は懸って地方の風紀および行政の良否に因るものにして地方自治は実に一国の基礎なれば国運の発展上ますますこれが改良発展を図らざるべからず」（明治42年7月27日『毎日新聞』）という方針のもとに自治矯風・教化と経済との両方における地方自治の捉進，地方改良運動が国策として推進されていた。それを受けて立つ性格を備えていたことは，「山形県立自治講習所設置の議」に明らかに示されている。

其一　設立ノ必要

国家ノ堅実ナル発達ハ地方ノ開発ニ俟ツモノ最多シ。殊ニ方今国ニ立憲ノ政アリ地方ニ自治ノ制アリテ庶制ノ興廃一ニ国民ノ努力ニ頼ルニ当リテハ，地方ノ不振ハ直ニ国家ノ萎靡ヲ来サズンバアラズ。是ヲ以テ輓近農村振興ノ問題ハ識者ノ盛ニ論議スル所ニシテ，行政上ニ於テモ亦地方改良ノコト自ラ独立ノ一畛域ヲ劃シ稍系統的ニ講究セラルルニ至レリ。而シテ地方改良ノ要諦ハ一ニ地方行政当事者ノ進歩発達ニアリ，二ニ一般農民ノ自覚向上ニアリ，三ニ地方有力者ノ堅実ナル活動ニアリ。若シ町村吏員ヲ初メ，青年団，産業組合，其他諸団体ノ理事者等皆適材ヲ得，熱誠ト卓見トヲ以テ農村ノ開発指導ニ任ジ，一般農民ヲシテ其地位ヲ自覚シ，弊習ヲ棄テテ進ンデ改善ノ策ヲ講ジ，又資産家，宗教家，其他ノ篤志者ニシテ克ク犠牲的精神ヲ以テ公共ノコトニ尽力貢献スルニ至ラバ，地方ノ改良期シテ俟ツベク国運隆昌ノ基此処ニアリトイハザルベカラズ。……産業及教育ノ発達ハ近時大ニ其効果ヲ揚グルニ至リシモ，独リ地方民ヲシテ農村生活ノ価値ヲ自覚セシメ，農村自治ノ振興ヲ企図セシムベキ地方改良上根本思想ノ教養ニ至テハ従来余ニ閑却セラレタルノ憾ナキ能ハズ。之ヲ換言スレバ最モ急ヲ要スルモノ却テ最モ遅レタルノ奇観ヲ呈ス。今ヤ大典ノ御挙行近キニアルニ際シ，自治ニ関スル講習所ヲ設置シテ此時運ノ要求ヲ充シ，以テ大典ヲ記念シ奉ルハ最モ策ノ得タルモノナルヲ信ズ。(3)」

第二に，那須 皓によって紹介されたデンマークのグルンドウィッヒを中心とする国民高等学校の思想とその運動がある。この「自治講習所設置ノ議」はこうした試みの実例として「デンマークニ於ケル農民高等学校ノ状

況」を情熱をこめ，称讃する筆致で附記している。(4)

キリスト者，藤井 武をはじめ，当時より昭和初期にかけて多くの人々に国民高等学校のヴィジョンを与え，その日本における実現への情熱をかき立てる力となったと思われる『国民高等学校と農民文明』の巻頭にかかげられた那須 皓による解題は，デンマークの国民高等学校を次のように描き出している。

1. 国民高等学校は通常の意味に於ける学校に非ず。これ，デンマークの詩人たり史家たり愛国者たるグルンドウィッヒの国民教育の理想を体現せるものにして，其目的とする所は一般民衆の性格を陶冶し，国民全体の文化を高め，ひいては北欧独特の民族的文明を建設するにあり。かの知識の注入と，パンの授与とを看板となして生徒を集め，気息奄々たる幾多卒業生を輩出せしむる滔々たる時流の学校とは全く其の選を異にす。
1. グルンドウィッヒはデンマーク近世の一大偉材也。彼れは近代に於ける北欧諸国の沙滞を歎じ，其の原因を遡り尋ねて国民的自覚の欠乏にありとなし，民衆啓発に対して当代の学校教育のよく為す無きを看破して，奮然起って，国民的自覚とキリスト教的人生観とを根柢とせる人格中心の高等教育を国民全体に施す可きを唱えたり。彼れの理想の凝って現れしもの，即ち此の国民高等学校なり。
1. 国民高等学校は青年の学校也。ここに来り学ぶ者は，多くは小学校修了後，数年間，実地労働に従事したる農家の子弟なり。彼等は此所に二冬期の間，人格高き教師と共同生活をなし，其の独特の教育によって啓発せられ，世界の発展と，現代文明の意義と，此の間に於ける自己及び自己の立場とを了解するに至り，智と情と意と共に高められ，高潔なる人生観，世界観を抱きて欣々として自己の旧業に房り往くなり。現在，デンマークに於ける国民高等学校は其の数八十個を算し，地方青年男女の約3分の1は此所に来り学び，之がために同国の文化は過去半世紀間に殆んど一変せられ，往年の貧弱国は今や農民の富裕の開明との度に於て欧州に1，2を争うに至れり。この状況に名けたるもの，即ち農民文明にして今やデンマーク農民の智解，見識は寧ろ都人士を凌駕せんとし，農民階級は単に経済上のみならず，又政治上，文芸上に於ても，将に一国の指導者たる地位を占めんとしつつある。(5)

藤井 武 は山形県にこのような農民文明の源泉となるような農民の学校を創設したいと希ったのであり，山形県立自治講習所はこうした夢を托されて誕生したのであった。しかし，問題は，藤井武自身がその指導にあたっ

たのではなくて，初代所長に加藤完治が選ばれ，10年間，この講習所の育成に当ったということにあった。それは，後に日本に展開してゆく国民高等学動運動に決定的な一つの方向づけ，性格づけをしてゆく要因と見てよいであろう。

加藤は10年後の昭和２年，茨城県友部に創設された最初の日本国民高等学校[(6)]の校長となるのであり，彼の教育方針で同校，および農場の経営をきりまわすこととなったのである。そして，それが昭和９年，茨城県内原の国有林の払下げを受けて移転し，内原の日本国民高等学校となり，やがて，満蒙開拓青少年義勇軍訓練所として満蒙開拓の中心となってゆくのである。

日本における農村更生のための国民高等学校運動を見る場合，加藤の農民教育の思想を考察する必要があることは云うまでもないが，その前に，農村更生運動の中心的推進力をなした石黒忠篤について一瞥しておく必要がある。石黒は子爵の長男として東京に生れ，東京帝大法科卒業と共に，明治41（1908）年に農務局に勤務しはじめた，大正13（1924）年，農商務省農務局長，大正14年には機構改正により農商務省が農林省になったが，その農務局長となり，また昭和６（1931）年に農林次官となるなど，昭和９年にいたるまで終始，農林省の役人として日本の農政に関する政策施行の陣頭に立って来た官吏であり，昭和９（1934）年退官後は，社団法人農村更生協会会長，農林大臣（昭和15～16年），農商大臣（昭和20年４月７日一同８月17日）等をつとめ，その間，農業報国連盟理事長（昭和16年），財団法人満州移住協会理事長（昭和17年）などをしている。更に，昭和26年，公職追放解除後は農林省顧問を依嘱され，更に，参議院議員として緑風会総務委員会座長をつとめたりする一方，全国農業会議所理事，全国農業協同組合中央会理事等々の責任をとり，昭和35（1990）年，77才で世を去るまで農事に専念して生涯を送った人物である。

石黒の日本の農業問題に対するアプローチの一つは，経済的方面，特に，小作問題，即ち，土地制度の改善の問題であり，もう一つは，農民教育の問題であった。

大正6・7年頃には小作争議が全国の農村のすみずみまで燎原の火のような勢いでひろがっていた。石黒は小作問題の解決には土地制度を改善して自作農をつくり出し，明るく住みよい農村を建設したいという理想を持っていた。彼は大正9年には小作調査委員会を設置し，小作分室をつくって委員に大学教授，その他の専門家を依嘱した。当時，石黒のもとで働いていた芹沢光治良（小説家）は，この小作分室にくるなり，石黒から云いつかった仕事はフランス農業組合の研究だったと云っている。(7) この小作分室はなかなか精力的に農民問題の現状調査をなしており，次のような仕事と取組んでいた。

○各道府県警察部からの小作争議，農民組合などに関する報告による調査。
○諸外国における土地制度に関する法令，小作慣行，その他これらに関係あるすべての文献の翻訳。
○国内における小作慣行調査。
○農民組合活動の調査と取りまとめ。
○現地出張による調査。
○委員会に提出する議案の協議。
○その他参考資料の作成。

この小作分室において，後に長くつづくいろいろの法制の原案が協議されたのであり，その中に，小作調停法案の原案，自作農創設維持規則の原案，小作法案などがある。大正11年に石黒が予算なしで完成した「小作慣行調査」は明治17年のきわめて簡略な小作慣行調査以来，第2回目のものであって，その後今日にいたるまで，これだけ膨大な調査はなされておらず，現在でもこの報告書がすべての小作制度調査の基礎をなしているということである。この調査は大学の研究室のようだと云われた石黒の小作分室の仲間のティーム・ワークによる共同事業であった。この調査を土台として「小作調停法」（大正13年）か成立したのである。(8)

石黒が力を注いだもう一つのことは，「自作農創設という仕事であった。今までのいろいろの試み(9)に批判的であった石黒は，小作農民が自作農の資

格を獲得するためには，長期，かつ，低利の資金が必要だとし，簡易生命保険の積立金の本格的利用の必要を主張して，逓信省の運営委員会を説得した。そして，低利長期償還の方法で大正15年以降25年を一期として，自作農創設事業を発足したのである。昭和2年3月農林省農政局が公表して世論に問うた小作法草案も石黒たちの作成になるものであるが，石黒は赤化思想にかぶれたという噂も一部に流れたほどであった。しかし，それでも，石黒が考えたほど容易に日本の小作農民を救うものとはならなかったようである。石橋湛山も「自作農地法は農家を救済せず」（昭和2・11・19『新農業対策の提唱』収録）において論じているように，…「自作農創定は，単に地主を救済し，耕地価格の下落を防ぎ，乃至，騰貴を促すに過ぎず，而して若し国家が此政策を取らないなら地主が将来蒙るであろう不利を，農家と一般納税者とに転嫁せんとするものである。」 自作農になりたい小作農が，道府県から資金の融通をうける場合，年賦償還金が現在の小作料よりも高くならないよう，利子補給に相当する補助金を国庫から毎年道府県に交付するなど，石黒はこまかい配慮をもって具体化に尽力した。しかし，農林省が立てた自作農創設の案はこうした批判を受けるような問題をも含んでいたのであり，土地制度の改革（農地解放）は敗戦後，進駐軍によって殆ど無償で強行されるに至るまで実現しないのである。

しかしながら，石黒が，多くの制約の中にあっても，国家が責任をとって小作農民に融資し，低利・長期償還の方法によって地主より農地を買い取らせようとする考えをもって土地制度の改革に当っていたことは重要である。

ところが，大正末期より兆候を見せはじめていた農村の不況は，昭和4年の秋，世界経済界の大恐慌の影響を受けて深刻化し，更に，昭和5年秋の空前の大豊作がもたらした米価暴落による豊作飢饉，翌昭和6年には逆に凶作飢饉と重なり，更に，農産物価格の暴落，鉱工商業不況のため，農閑期の出稼収入の激減（これが農家の主要な収入源）鉱工商業の失業者を多数農村に抱えこむこととなったことなどにより，農村の窮乏化は激化

した。農家は金は1円も見ることが出来ず，原始的物々交換の状態となった。敷島（タバコ）一個が米一升，散髪するのに米二升，農民は水に塩を入れてしよう油の代りとした。娘の身売りが激増し，製糸工女に行ったものも3カ年間現金を払ってもらえなかった。欠食児童は全国20万人（昭和7年），各町村平均45人だったと云われ，また，農民に納税能力がないために村長，助役，巡査らをはじめ，学校教員らの俸給も未払状態が全国的に見られた。[10] 長野県のみで昭和5～6年の間に小学校教員給料未払は学校数425，教員数7512人である。[11] 世相不安が深刻となり，農村救済の問題が世の大きな関心事となって来た。日本ファシズムの特質の一つに農本主義のあることはよく云われて来たことであるが，こうした農村窮乏化が都会偏重より農村振興へ，郷土主義，農村自救へという思想と行動とを捉進したことは周知のところである。

既述のように，農民の問題を一方，「土地制度」の角度から取組んでその改革を追求していた石黒忠篤は，他方，「農民精神の作興」，「よき農民をつくる教育」という角度からの農村更生策を実践しようとする。これは石黒の農村政策の車の両輪とも見えるし，また，他面，物質面の改革がきびしい現実の壁にぶつかると精神主義的解決へと傾斜して行かざるを得なかったとも解釈出来るであろう。石黒らを中心として，農村更生運動の外廓団体である農村更生協会が生れるのは昭和9年12月のことであり，『農村更生時報』という雑誌も発行されるようになった。昭和8年，農村対策として設けられた内政会議（文部省は教育改革は自分たちがやるといって不参加）では，農村対策樹立の根本方針の一つとして「農民精神の作興」がとり上げられており，「国家の堅実なる発達を計るために農民精神を作興し協力一致の精神を基調とし，かつ農業技術および経営の改良進歩を計り農村更生を期することを緊急とす。」と云い，そのために，勤労主義に徹した農村中堅人物の養成，実習的訓練などをあげている。そこで農民道場が農林省管轄のもとに誕生するわけであり，先づ八ケ岳に中央修練道場が設立された。それがやがて修練農場，漁村修練場（通称，農民道場）とし

て文部省直轄の学校とは全く系統を異にした（あるいは，文部省と対立して）農村中心人物養成を目的として全国各地につくられてゆくこととなったのである[12]。この場合，修練農場の原型が加藤完治の自治講習所，あるいは，友部——内原の日本国民高等学校であったことはいうまでもない。

農民道場は，年令に制限なく，何度入ってもよく，年限も1年でも，2年，3年でも本人の希望通りであり，男女の区別もなく，教師の資格も問題にせず，衆望を負う人格，技術両面において立派な人物であればよく，農場が即ち教科書だという農林省の意見に基いていた。昭和9年以降は国庫助成をすることとなったので（同年，20道場に10万円交付），3・4年の間に全国各府県に農民道場が出来た。農林省当局の修練農場に対する力のいれ方は格別であり，農場長の人選には経済更生部長をはじめ，各課長，係官立会いで人格者を選ぶことに努めたという。そして，その指導理念は後述するような加藤完治の極度に精神主義的な農民訓練の方法が一般化して行ったのであり，石黒忠篤の農林政策の基本となる車の両輪の一つである土地制度の改革を基礎としての小作解放という物質面の解決策は後退し，もう一つの農民精神作興の面のみが加藤完治の教育精神に強く受けとめられ，展開して行ったのではないかと思われるのである。そして，農村恐慌をはじめとする日本社会全体にわたる経済危機と，社会不安の中で上記の精神主義的教育方針は更に強烈化されてゆくことになったのである。（加藤の教育理念と同様の指導理念で農民教育にあたった各府県の国民高等学校，農民講習所等については拙著『天皇制思想と教育』180頁参照）。

さて，ここで，本稿の中心課題である加藤完治の教育思想とその方法を考察し，当時，日本の農村更生を目ざしていた筈の農民教育運動としての国民高等学校運動の本質の解明を試みたいと思う。

3　加藤完治の教育思想とその方法

a．キリスト教から古神道へ

国民高等学校運動を通して日本における農民教育の一つのタイプの理念

と方法とを創出した加藤完治の人間形成のプロセスを先ず概観してみよう。彼は，明治17（1884）年，東京本所の旧士族の子として生れたが，早く父を失い，母と祖母と叔父との世話で育てられた。明治維新後，俸祿を返したあと，彼の家の親戚の多くは炭屋になったと云い，皆，炭のように固い人たちだったと彼は語っている。そして，彼の家も父の存命中は大きな炭問屋だったという。母や祖母は小学校を卒業すると彼を炭屋に奉公に出そうと思っていたのであるが，学校の成績が非常によかったため，上級学校に進ませることになった。学用品等を買うことも含めて叔父からもらう一カ月の小使が五十銭であり，彼の住んでいた下谷（今の台東区）車坂町の家から築地にあった府立第一中学校（試験に落第したら奉公，及第したら学校と云われていて合格した）まで二里の道を毎日テクテク歩いて通ったという。鉄道馬車は往復18銭で50銭の小使では3回往復する分にも足りない。数え年14歳で毎日往復4里の道を歩いて通いぬくという苦しい訓練は彼の後の鍛練陶冶主義，貧苦粗食に堪えぬいて労働するという勤労主義，苦しい労働そのものを尊重するといった思想の土台を培ったものと云っていいであろう。

更に，叔父がきびしく偏食を許さなかったこと，剣道，機械体操，水泳などを熱心にやったことによって病身だった体が非常に健康になったと共に，精神的にも，身体的にも鍛錬の意味を更に強く学んだことであろう。また，不幸な再婚をした母が，貧乏のどん底に落ちこんで，夫と二人の子供の看病をする惨めな生活の中でも，「裏店に住んで居ても心は武士の娘だ」と心に誇りをもち，堂々として病人たちの世話をしぬいた心意気に彼は感動し，その母の精神に生涯はげまされて来た。こうした幼少年期の生活経験はすべて彼の物質的制限を精神力でのりこえるという心情と生活態度の基礎となったものではないかと思う。

府立一中を経て，明治35年，金沢の第四高等学校に入り，在学中，西田幾太郎に傾倒すると共に，北陸女学校のアメリカ人宣教師ミス・ギブンスの暖い人柄に感銘を受け，その人格的影響によって植村正久の弟子の1人

富永徳磨の石浦町教会（金沢）で受洗，熱心なキリスト教信者となった。それは，ミス・ギブンスがたった一人でアメリカから金沢の地に来て住んでいながらも，イエス・キリストが共におられるから少しも寂しくないと常ににこやかにしているのに，母と祖母とを失って寂寥にあった彼は驚いたと云っており，更に，彼女が非常に親切であって，酔っぱらいが暴れ込んでも少しも怒らず，追い出そうとする加藤らにも“Be kind”と云ってやさしかったこと等に感動し，自分らもキリスト教信者になろうと決心したようである。更に，青年期の罪悪感をかかえていた加藤は，西田天香の懺悔の生活にも心ひかれると共に，植村と同様，福音主義的信仰に立つ富永牧師より懺悔によって罪，けがれをあがなわれて神のところにゆけるという教えを叩きこまれたと云い，ある学友は懺悔の思いに苦しくなり二階から飛び降りた者もいたという。このようにして加藤も罪を懺悔し，洗礼を受けたと云っている[13]が，福音主義的富永牧師の指導もあったとは云え，当時の加藤のキリスト教理解，入信の動機等は非常な心情主義的で，感覚性が強いように思える。そして，一度入信すると，天皇から乞食にいたるまで日本中の人々をキリスト教信者にしようと思ったと語っており，儒教の四書五経の教えと「忠君愛国」にこり固まった叔父をもキリスト者にしようとしばしば説得に努めたという。

明治39年東京帝国大学工学部に入学したが，柔道の過労により発病，約3年間休学，療養生活を送った後，東京帝大農学部に編入，那須 皓と親交を結んだが，那須氏は農場で働く加藤が誰が見ていなくてもおどろくほど誠実，かつ，熱心に働くのに感心した。それが加藤に関心を持ちはじめたはじめだと筆者に語った。この頃，農科大学の学生と実科の学生とで「尚友会」をつくっていたが，この会は「疲弊せる農村を救済し，我が帝国の運命を泰山の安きにおくは，外植民政策と内農村開発に待つ外なし」という趣旨によるものであり，加藤や那須はその仲間であって，藤森成吉の『若き日の悩み』のモデルだと云われている。

卒業後，内務省，及び，帝国農会の嘱託となったが，中小農保護政策に

関心をもち，形式的な役人の仕事では国民の中に入って働くことが不可能だと思い，他方，思想的苦しみをももち，役人生活を止めて農民になろうと決心した。

彼はその頃のことを次のように語っている。大学卒業後，内務省と帝国農会の役人をしていた時，よく東京の貧民窟に入りこんで貧民の問題の研究をしたりしていた。トルストイの書物を熱心に読んでいた頃でもあった。貧民は世の中からなくならねばならぬ。しかし，都会で貧民問題を考えるのは，川下で「ゴミ」さらいをしているようなものだ。農村からそういう人を出さないようにする。農村の生活を安定することが一番大切だと考えたのである。農村問題の解決が出来ないと都会の貧民窟は解決出来ない。農村問題は国民の死活を決する根本問題だと思い，農村問題を解決つけるものは大臣でも，教育者でも，宗教家でもなくて，農民自身だと考えたのである。そこで農民になろうと思うが士族出身では土地がない。小作人になるにも先ず農業を学ばねばならない。そこで彼は利根郡長をしていた先輩の前田多門と千葉県公平村長の石井寛一と愛知県安城農林学校長の山崎延吉との3人に依頼を書いたところ，3人から何とかするからすぐ来いという返事があったという。

このようにして，大正2年，農学者山崎延吉の好意により，彼が校長をしていた愛知県安城農林学校の教師として迎えられることとなり，農地を与えられ，農耕を初歩から学びながら農民としての生活をはじめたのである。筧克彦の影響で神道（神ながらの道）を信奉するようになったのはこの時期のようである。大正4年，さきにふれた藤井 武の山形県立自治講習所に懇望されてゆくこととなったのは，初代所長の人選を依頼された東大農学部の農政学教授矢作栄範の強い推薦によったと云うことである。

加藤が一度，キリスト教信仰に入りながら古神道に転向したということは，キリスト者のタイプとしては，「背教者」の一タイプと見ることが出来るであろう。入信当時より彼のキリスト教理解は，上記の入信の動機においても明らかであるように，罪の自覚も『原罪』とキリストの十字架による

救いの意味の正しい理解に基くよりは，非常に感覚的心情的であり，主観的である。

そして，ミス・ギブンスの生き方からも，キリスト者の在り方を「愛の実現」を課題とする生き方，実践としてとらえられており，それはまた，トルストイの思想への共鳴ともなった。そして，悩める者の友となり，隣人のために，愛の業をするということは，彼においては貧困や逆境にあるものを経済的に扶けることに直結したらしい。しかも，そうした彼の「愛」の理解に基づいた博愛慈善の行為がめぐみを受けた対象によって裏切られる時，「アメリカ式慈善事業」は人間に乞食根性を起させるという疑問となり，キリスト教そのものに懐疑をいだかせるに至ったようである。キリスト教というものがわからなくなって煩悶し，自暴自棄に陥ってしまったと語っている。(14) それはキリスト教信仰をくぐった上での「背教」ではなくて，感覚的，心情的，主観的キリスト教理解における感動と，それの現実的幻滅におけるキリスト教の否定であり，しかも，彼は今日にいたるも本当にキリスト教を棄てたとは考えておらず，あとでふれるように，古神道によってキリスト教は本当に生かされると考えているのである。

このようにキリスト教を離れた加藤は「農の意義」の発見に到達するのであるが，その後，いろいろの煩悶をもち，赤城山中をさまよったりしていて，山中で死にかけた時，始めて「生きる」ということが本当にわかったという。生を肯定し，生命を大切にしなければならないと考えた時，生きるためには，衣食住がなければならないということがわかり，食物を生産する農業の尊さがわかった。「私は自分の生を肯定して始めて真に農の意義を知ることが出来たのであります。……『生きる』ということを決めてからってものは，農がわかって，農がわかると今度は生きることを決定した以上は，農に励むということになるわけです。そこで衣食住の生産に努力するは善なりと，こうなっちゃう。これが本です。(15)」そして，こうした農の意義の発見より，農作物に対する感謝の念がおこり，更に農産物の生産に汗を絞る農民に対する感謝の念が当然起って来た。

農業経験を通して，加藤は，農業は「俺が作る」のではなくて，相手が生命ある生物だということであり，神の力によって米も麦も出来る。「農業は天地の化育を賛する聖業」だとした日本民族の先祖たちの考えがわかるように思えた。そして，農民自身が農業の意味をよく理解し，農業が神の御力によって行われることを体得することが根本だという考えから，農民教育を神社参拝を中心としてなすべしとする筧克彦に共鳴を覚えたのである。加藤は，農業とは作物に自己を捧げることであり，自我本位の我儘根性を破らなければならないと云い，日本精神とは，日本国，即ち，大日本に自己を捧げつくすことであり，ここに農民魂と日本精神とはその神髄を一つにすると考える。そして，彼が首唱し，卒先実践しつづけた荒地の開墾のような苦しい労働は，こうした農民魂の鍛錬陶冶に欠くべからざるものと考えられたのである。深耕と施肥——それは土地を愛することであり，自分が天地と共に衣食住の生産に汗を絞ってゆくことは農民魂を磨き上げることであった。

以上のように，農業の経験を通して，また，筧克彦の古神道との接触を通して，農業の意義，ないし，農民魂を右のように把握するにいたった加藤は，更に，筧の思想的影響によって古神道的日本精神を信奉するにいたるのである。

ここで筧克彦の古神道とは何かを一べつする必要がある。大正2年，加藤完治がキリスト教から古神道に傾斜して行った頃，加藤の受洗した，金沢石浦町教会の牧師であった富永徳磨と 筧 克彦（法学博士，東大教授）との間に，筧の唱える「古神道」の本質をめぐって，更に，古神道とキリスト教との関係にもふれて，雑誌『新人』（海老名弾正主宰）誌上で意見がたたかわされている。富永の提起した疑問[16]に対して筧は『新人』第14巻第2号に，「古神道弁」と題して，次のように古神道の弁明を試みている。

古神道とは随神道（カムナガラノミチ）（又，惟神道と書く）を指すのであり，最初に日本民族の真心を通じて先づ其の中に実現せられた真道である。それは皇道とも，民道とも云うことが出来るが，それらを共に包容している日本道であり，

神の大生命に帰一する惟神道，即，随神道である。

それでは古神道の神々の本質は何か？　古神道では大別して二種類の神々を認めていると云い，第一種の神，即ち，天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）は世界の中央にして其の根柢たる神で，又，一切に遍満している神であるから，宇宙一切の真の大生命であり，一物とてその顕現でないものはない。第二種の神，即ち，八百万神，云いかえれば，無数の神々は唯一神である天之御中主神の表現者である。互に相対立しつつ天之御中主神に帰一する神々である。神社にまつられている神々に限らず，大多数の万物もまたその根柢に存する生命において神である。祖先宗教，英雄崇拝，天体崇拝，自然物崇拝等の材料はすべて大精神によって統一せられ，お互に他の権限を尊重しあい，その神性を発揮する。古神道の多神は一旦一神に帰一し，更にその根拠の上に存する多神であり，古神道は特殊の汎神論，即ち，「表現汎神論」だという。筧の説く表現汎神論によれば神々も人間も万物も何ら差別なく神（天之御中主神）を顕現するものであり，そこには神々と人間との区別，万物と区別しての人間性の問題，人格的個我の把握などは何ら問題にならない。

また，表現汎神論の古神道は，その包擁性において仏教をも同化し，見事な「日本仏教」を結晶せしめた。日本仏教は日本人が神道の精神によって救済した仏教だというのであり，更に，キリスト教が古神道と融合する暁には，雄大な日本的キリスト教が生れ来るだろうというのである。

筧の「古神道」は一口に云えば，神道のヘーゲル化であって，ヘーゲルの法哲学を借用して神道の神観を解釈しなおし，部分が全体を示しているとする表現帰一の理論で惟神道（かんながらのみち）を説くのであり，天之御中主神を普遍我とし，それが多くの神々や万物に顕現するとするのであって，借用したヘーゲル哲学によって近代的に武装して，当時，多くのインテリゲンチァをも説得する力をもった理論だったのである。

以上のような筧克彦の古神道に最も深く共鳴を覚えた加藤完治は，キリスト者を棄てるといった背教者としての自覚を持つことなく，古神道にお

いてキリスト教も本当に生かされるという考えで古神道に移行したのである。（加藤は今日もそう信じている）。そして，上記のような汎神論的立場において万物は神の顕現と見，農作物も土も神のあらわれとして，それに献身して労働する農民の在り方を農民魂と唱えるにいたったのである。そして，筧理論を「一心同体」と「各自の分担」の二つの概念として受けとめ，それをもって，農民教育，農村形成へと実践して行ったのが加藤であった。

更に，上記のような古神道の汎神論的，あるいは，「表現帰一」的神観に基づいて，日本帝国を一つの大生命と見，国は「国民全体に遍く通ずる我」という意味での「普遍我」だと見，筧が当時論じたように，国民と国家とは別物ではなくて二者一如の姿をなす表現帰一の関係にあるとする立場に深く共鳴する。「天皇は日本帝国という大きな生命の中心にましまして，その大生命を国民全体を引き連れながら，総攬表現されて居るのであります。…国民は其の天皇の大御心を奉じて各自の受持分担を果しながら，大日本帝国と云う大きな生命の栄え行く様に努力奮闘する，それが真の忠であります。」[17]天皇は今やヘーゲルの絶対的精神に代るものとなるのである。

加藤は筧に出逢ってから「日本人」ということ，また，「日本精神」ということがだんだん明らかにわかって来た。大日本帝国という大きな命の弥々益々栄えてゆくのに自己を捧げ尽すという所に我々の忠孝の真髄があるということが分って来たと云っている。ここで興味深いことは，忠孝でこり固っていた彼の叔父が，加藤が長い間，キリスト教信仰に導こうとしても頑として受けつけなかったのに，筧の皇国精神の講演をきかせると，「五十有余の今日，忠の意味がはじめてわかった」と云ったと云い，かつて，愛知県立農林学校で筧先生のお話をきくことによって純日本人としてのよみがえりをもった自分は，今や叔父と共に同じく「忠君愛国」の精神にめざめたのだと語っている。加藤の受けた家庭教育の底流――それは，儒教的忠孝思想のようなモラール，あるいは，貧しい家族が身をよせあって貧苦に堪えつつ，力をあわせて刻苦勉励して来た血縁的共同体感等，彼

が高等学校や大学で接した近代西洋思想につながる個人主義や合理主義や近代科学主義，あるいは，キリスト教等とは異質の「故郷」の生活をささえた共同体感とエーストなど——が筧の古神道を媒介として体系を与えられ，新な生命力となって噴出する道を見いだしたのかもしれないし，そうした思想にこそ，加藤は魂の故郷に回帰する安心を覚え，そこに安住する人となったのかもしれない。それが，当時の最高学府に学びつつもこうした最も伝統的な思想を己が道として断乎として把握し，彼が再び悩み，迷うことをしなかった要因であったのかもしれない。もっとも，他方，丁度，この時期が，「忠君愛国」の国民道徳の理念が第二次国定教科書（修身）にも，また，国民道徳運動の教育理念としても明確にされつつある時期であり，神道が復興をはじめるのもこの頃であったことを考え合わせる時，加藤における信仰上の転向は上から来る時代思潮への一つの積極的応答であったという面も勿論あったかもしれないのである。

いづれにせよ，以上においても明らかであるように筧の古神道に基づく加藤の日本精神の理解においては，国民の個々の人間性の主体的把握は全く欠如していることが明らかである。そもそもそういう発想が内在していない。この点，田沢義鋪の修養論が，「大いなるもの」といった汎神論的神観とも云うべき宇宙大自然の生命を基盤として人間をとらえる一種の宗教的人間把握をなしつつ，「全一思想」（全体主義的思想）と「個在分立の思想」（個人主義）との綜合において人間をとらえようとする立場を堅持し，一種の土着的ヒューマニズムの要素を内在させている[18]のと比較する時，加藤の思想には個的人格性を含んだヒューマニズムの可能性は見られない。

b. 日本精神鍛錬のための農民道場

それでは大和民族の理想信仰を鍛錬するには，どういう教育方法をとるか？　加藤は『弥栄』巻頭においても，「大和民族の理想信仰を弥々鍛錬陶冶するための「実修の形式」として，「1，禊（みそぎ），2，参拝，3，

武道，4，読書，5，事々物々に就きての修業」をあげているが，彼は一つの事柄を繰返し繰返し行う「行」を最も重要とする。

第一に，禊（みそぎ）は，水を浴びて心身を浄め，穢れを払う行であり，それは欲を去る行だと云う。彼は毎年，生徒をつれて伊勢神宮に参拝する時，二見ケ浦の海に飛び込んで「みそぎ」をした。海で危険なことがあったりしたことから，その後は風呂場で水浴びをするようになったと云っているが，友部や内原の国民高等学校，ないし，訓練所の教育において「禊」は重要な行事であった。加藤の説くところによると，日本魂の鍛錬陶冶としてのみそぎは，自分の罪穢れのみならず，日本国民全体の負っている一切の罪穢れ，更には，人類全体の罪穢れを自分一身に引受けて，それを洗い流してしまうという雄大な精神だというのであり，日本精神の禊は，キリストが総ての人類の罪を一身に引受けて自ら磔にあったのと同じ精神だと云う。しかし，この禊という行事は，神道の祓（はらい）と同様，人間の罪，けがれをこうした行事によって取去り，清めるという意味をもつものであって，罪の把握が表面的，感覚的，あるいは唯物的である。

古橋源六郎翁という愛知県稲橋村の村長が敬神尊王愛国を旗印として正月の三カ日毎朝村民全体が神社に集合し，寒い板の間に坐り，太鼓を叩いて心を清めて禊して参拝するのを，これこそ神人合一の行である。日本精神鍛錬陶冶の実習の立派な形式だと高く推奨していることにも見られるように[19]，「神社参拝」は農民教育，日本魂鍛錬のために非常に大切な方法だと加藤は考える。二拝二拍手一拝という簡単明瞭な形式による礼拝は淡白で結構な形式だと云い，国民高等学校の教育においても，また，後述する満州開拓団においても神社参拝は精神教育の中心であった。これは，後に，第二次世界大戦中，地域共同体や学校教育において神社参拝が重要な行事となり，これを軽視する者，あるいは，拒否するものにいろいろの共同体規制が加わり，遂には投獄などという法的規制までが加わるにいたった神道的国民儀式の定型化は，加藤らによって昭和期的原型が生み出されたものと云えないであろうか？

更に，山田次朗吉の直心影流法定[20]の武道を学んでいた加藤は，人と人とが相対して互に大和魂を磨き合う修業としての武道を彼の学校の教育にとり入れていた。それは剣道を教課としただけでなく，開墾，打込み，打起しは剣道の奥義に通じるものとしたのであり，打込み，打起しをみっちりとやらせなければ底力のある農民魂を入れることは難しいとした。まさに日本的行による精神主義的教育が加藤の教育の根本理念であった。そして，こうした大和民族の理想信仰を鍛錬陶冶するために最もよい場所は農村であった。加藤が農民教育に異常な熱心さを持つのは，日本帝国という一大生命に自己を献げつくす日本精神を日本国民に学び取らせるためには，荒地を開墾し，農作物に自己を献げて労働する農業による訓練こそ最適の方法だと考えたからであった。剣道の修行と同様農民には重い鍬を持たせれば真剣にならざるをえないのであり，無念無想，剣気体の一致も出来，深耕も出来ると云う。そしてこのようにして鍛錬される農民魂こそ大和魂だというのであって，加藤においては，日本農民魂の鍛錬陶冶は，まさに，日本精神の鍛錬陶冶であった。きびしい労働そのものが尊いのである。ここに加藤の農民教育思想の真髄があると見てよいであろう。

大正4年，藤井 武の農村の中堅人物としての町村吏員の養成を目的として創始した山形県立自治講習所の初代所長に懇望された時，加藤は，「私は農民をつくるのが目的だ。それに農場もない講習所など意味がないし，引きうけられるか」と云って躊躇した。しかし，藤井は農場をつけることを提案し，また，親友那須 皓のつよいすすめもあって加藤が引き受けたことによって，この「自治講習所」は文字どおり「農民道場」になった。彼はその開所式に於て，「この学校は職員生徒が畑の真中で大和魂を鍛錬陶冶する道場であります」と言っている。自治講習所には地主の子弟も自作農や小作農の子弟も入所した。加藤はさっそくこれらの子弟たちと労働を共にやりながら農民魂を鼓吹した。それは，耕作することは不可能と断定されていた大高根の開墾，農地の深耕など労をいとわぬ烈しい農業労働をやりぬくことであった。

こうした加藤の農民教育に感銘を受けた石黒忠篤との間にやがて「水魚の交り」と云われるような親交がはじまった。石黒はさきにもふれたように，石黒農林政策の二つの基本線，即ち，土地制度の改革を基礎とする小作の解放という物質面の解決策，及び，これと並ぶもう一つの面としての農民精神の作興のための農民道場などを設立しつつ，農民教育の推進を企図していた。ことに，那須 皓の訳した『国民高等学校と農民文明』に刺戟されて，日本にもデンマークのような国民高等学校を作りたいというねがいを持っていた石黒は，加藤をはじめ，那須皓（東京大学農学部教授），橋本伝左衛門（京都大学農学部教授），小平権一（農林省農政課の輩下）らと相談の上，遂に，大正15年5月19日，茨城県友部に石黒，橋本，那須，山崎延吉，小出満二，小平権一らを設立発起人として「日本国民高等学校」を設立するに到るのである。そして，大正11年より約1年4カ月の間，石黒が旅費を工面して海外視察旅行に出し，特に，デンマークの国民高等学校を見学させていた加藤完治がその校長として迎えられることとなったのである。

「日本国民高等学校設立趣意書」は次のようにその目的，趣意を説いている。ここには加藤の山形における農民教育，発起人たちの加藤に関する評価等と共に，この学校の目ざす課題や設立者たちの考えがよくうかがえるので，少し長いが，全文を引用することとする。

日本国民高等学校設立趣意書

「国運ノ消長ハ懸ッテ農村ノ隆替ニアルハ，之ヲ興国ノ歴史ニ徴シ，世界経済界ノ風潮ニ察シ，更ニ健全ナル社会発達ノ要因ニ稽ヘ我等ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。近時，農村振興ノ声，朝野ノ間ニ喧シキ蓋故ナキニアラズ。疲弊セル現下ノ農村ニ新局面ヲ打開セムガ為ニ採ルベキ手段方策ハ政治的，経済的，社会的各方面ニ於テ種々アルベシト雖モ，畢竟農民自身が覚醒奮励シテ農業経営ノ発展ニ努メ農村生活ノ改善ヲ計ルニアラザレバ，如何ナル施設対策モ終ニ其ノ効果ヲ見ル能ハザルヤ明ケシ。我等ガ今日ノ深憂トスル所ハ農村ノ衰退ソノモノヨリモ寧ロ農村ニ於テ其ノ頽運ノ挽回ニ努力スベキ人材ノ欠如セルコトニアリ。複雑ナル経済界ノ変動ニ適応シテ農業ノ経営方法ノ改ムル学識技能アルト共ニ欠陥多キ農村ノ社会生活ヲ革新スル

勇気ト抱負トヲ有シ，而モ額ニ汗シテ土ヲ耕シ以テ天地ノ化育ヲ賛スル崇高ナル農ノ使命ヲ了得シ其ノ天職ヲ楽シンデ之ヲ尊重スル農民ノ多ク存セザル事ニアリ。

我ガ農村固ヨリ有意ノ青年ニ乏シキニアラズ，唯其ノ現状ハ彼等ニ自ラ悟ルノ余裕ト教ヘ導クノ機会トヲ与ヘザルガ故ニ其ノ従事スル農業ノ尊重ト労働ノ神聖トニ関シ信念ヲ抱持スルコト能ハズ。進路ニ迷ヒ暗中ニ模索シ徒ラニ前途ヲ悲観シテ意気沮喪シ了ルモノ比々皆然リ。此等有意ノ青年ヲ訓育シテ自覚セル農民トシテ立タシムルハ実ニアラユル農村振興策ノ根底ニシテ，今日ノ急務之ヨリ先ナルハナシ。

彼ノ北欧ノ小国丁抹（デンマーク）ガ国運衰退ノ極ヨリ僅々半世紀ノ間ニ於テ農村今日ノ繁栄ヲ来シ，持色アル其ノ文明ヲ有スルニ至リシ事蹟ハ実ニ其ノ国民高等学校ニ於ケル特殊ナル農村青年教育ニ基ケルモノニシテ，此ノ他山ノ石ハ以ッテ我国ヲ磨クヘク且我等ノ所信ノ謬ラザルヲ証スベシ。

然レドモ斯ノ如キ農村青年教育機関ハ単ニ資金設備ノ充実ノミヲ以テ之ヲ期スルヲ得ズ。其ノ最モ主トスル所ハ中心タルベキ人物ニシテ実ニ特種ノ天分ヲ有スル人格者ヲ得ルコトヲ絶対的ノ必要トス。然ラズムバ徒ラニ精神無キ形骸ヲ作ルニ過ギズ。多数現存スル各種教育機関ノ屋上更ニ屋ヲ架スルニ止マラムノミ。而モ青年ノ訓育ト農業経営ノ実際的改善ト而シテ農業労働ノ尊厳ニ対スル信念ノ鼓吹ト此ノ三個ノ事業ヲ一身ニ綜合躰現シ得ル人格ニ至ッテハ，我等ハ多年農業界，及，教育界ニ於テ幾多ノ人材ニ接スルト雖モ其ノ中ニ就テ之ヲ求メテ頗ル得易カラザルヲ憾ム。

独リ山形県自治講習所長農学士加藤完治君ハ堅実剛毅熱誠力行ノ士ニシテ，我等ノ済シク認メテ以テ天成無二ノ農村教育家トナス人ナリ。氏ハ既ニ丁抹国民高等学校ノ精神ニ則リテ建設セラレタル本邦唯一ノ該講習所ニ青年ヲ訓育スルコト茲ニ10年，此ノ間卒業生ヲ出スコト270名，短期聴講生ヲ出スコト1200名ニ及ビ，其ノ感化ヲ受ケタル青年ハ県下ノ農村ニ普ク，氏ヲ敬慕スルコト父ニ優リ，氏モ亦之ヲ念フコト子ノ如ク，漸ク東北農村開発ノ大原動力トナリツツアリ。

自治講習所ニ於ケル訓育ハ丁抹国民高等学校ノ単ナル模倣ニアラズ，氏ハ現下稀ニ見ル精神家ニシテ，学生時代ニ於テハ基督教ノ研究ニ心ヲ潜メタルガ，卒業後，熱心ニ古神道ニ傾注シ，今ヤ我邦農村問題解決ノ根本及青年訓育ノ基礎ハ之ヲ皇国精神ニ置カザルベカラズトノ信念ヲ以テ躬ラ鍬ヲ執リ諸生ニ伍シテ農業労働ニ従事シ，大学ニ於テ修メ得タル学識ト其ノ後十数年ノ努力ニ依リテ体得セル老農ヲ凌グ実地ノ技術トニ依リ彼等ヲ訓育シテ学問ノ真義ヲ味ハシメ，知識ノ活用ヲ教ヘ更ニ武道ニヨリテ心身ヲ鍛ヘ開墾及農場実習ニヨリテ勤労ノ風習ヲ養ハシメ以テ農村青年ノ餓ウルガ如ク何物カヲ欲求シツツアルニ対シ健実ナル人生観ト農村改良ニ資スベキ実際的訓練ト義勇奉公ノ熱情トヲ徹底的ニ与フルコトニ努メツツアルナリ。

而シテ其ノ北村山郡大高根ノ農場ノ如キハ，従来人ノ棄テテ顧ミザリシ月山山系中腹ノ荒野ナリシヲ，氏ガ毎春諸生ヲ率ヒテ入山シ其ノ年の半ヲ共ニ耕シ共ニ寝ネ

テ力行開墾セシモノナルガ，新作物ヲ入レ畜産ヲ加味シ適切ナル経営ヲ行フコトニヨリテ今日既ニ収支償フテ余リアルノ状ヲ示シ附近農民ニ範ヲ垂レツツアルニ到ッテハ，亦以テ氏ノ単ニ教壇ノ人ニアラザルヲ知ル可ク，氏ノ熱誠ト共ニ其ノ事業ノ真価トヲ思フトキ我等ハ毎ニ深甚ノ感激ニ打タレズムバアラザルナリ。

曩ニ氏ハ知友ノ勧告ニ従ヒ山形県，又，卒業生ノ賛成ト新潟県中野財団ノ援助トニ依リ，遠ク丁抹ヲ訪ヒ国民高等学校ニ止ルコト約一年，仔細ニ其ノ実生活ヲ体験シ表裏長短ヲ知悉シ，欧米諸国ヲ巡遊シテ帰国シタルガ，昨秋ハ諸生ヲ率イテ渡鮮シ，日鮮相互ノ真ニ渾一セル将来ノ農業発展ニ貢献スル端緒ヲ啓ケリ。

我等ハ氏ガ山形県自治講習所ノ確立ニ尽シタル十年ヲ期トシ，茲ニ其ノ間ノ実際的経験ニ基キ更ニ一歩ヲ進メ別ニ広ク全国農村青年ノ為ニ独持ナル教育機関ヲ創立シ且之ニ相当広大ナル農場ヲ附設シ，関係者ヲ以テ一ツノ農村ヲ建設シ，多年懐抱セル理想ヲ実現セントスルノ案ニ参劃シ，政府ガ最近行政整理ノ結果廃止セル友部種羊場が位置，地積，建物等ニ於テ此ノ独持ナル教育機関設立地ニ最好適ナルヲ認メ，之ヲ購入，又ハ，賃借シテ実行ニ進マムコトヲ切望シテ止マズ。既ニ此ニ人アリ，此ノ土地アリ，而シテ，社会ハ此ノ種ノ機関ヲ要求シツツアリ。

此ノ計画ハ既ニ機熟シタリ，然レドモ唯一ツ欠ク所ハ其ノ事業資金ナリ。我等ハ此ノ挙ガ健全ナル理想ト確実ナル基礎ノ上ニ立ツモノナルコトヲ確信スルガ故ニ，篤志ノ諸賢ニ訴ヘ其ノ賛同ト拠金トヲ得テ茲ニ社団法人ヲ設立シ目的ヲ遂行シテ邦家ニ貢献スル所アラムコトヲ希フ。」

そして，井上準之助，石黒忠篤は夫々参万円の寄附を卒先申出ている。このようにして，58町歩の附属農場をもつ日本国民高等学校の校長として加藤が経営を切りまわしはじめたのは昭和2年からであった。

国民高等学校の教育は，農場，寄宿舎，教室等を一貫して心身錬磨の道場とし，職員，生徒は居常寝食を共にする一心同体の大家族として立ち，各自分担の作業に励み，協力による自覚的経営を行うこと，及び，真剣な農業労働によってその崇高な精神を体得し，常に農業の真の意義を味うと共に，農業改善に努めること等を目的とする。生徒は家が地主たると，自作農，あるいは，小作農たるを問わないが，将来農村の中心人物となる者，並に，内地，及び，満鮮等に殖民しようとするものを農村改善上先づ入学させるとうたっている。

大正4年より加藤が所長として山形県立自治講習所の指導にあたり，独自の農民教育をうちたて，後に山形県立国民高等学校となっても定型化し

て存続し，更に，友部，内原の日本国民高等学校にも，更にその他全国各地に出来た国民高等学校にとっても原型となった教育目的，ないしは，理念，及び，その方法はどういうものであったか？

国民高等学校の育成する人物は農業，農村を熱愛し，農民道念の権化でなくてはならないというのであり，第一の目標は農家経営であり，所属農場20町歩の中に標準農家10戸を建設し，各家に約2町歩の田畑を専属し，1戸毎に数名の生徒を収容して，一家族を構成せしめ，夫々専任教師指導の下に生産，販売，消費等一切の農家経営を立案協議し，実施体験せしめる。第二の目標は農村経営であり，前述農家3戸及び職員住宅1戸を以て一部落を成し，隣保相助の部落共同体を体験せしめ，部落経営を研究せしめる。農村改良を考案実施し，学園全体を以て理想的「新しき村」を建設経営せしめ，以て公民訓練を行う。第三の目標は組合経営であり，各農家を以て構成する販売組合，利用組合，共同農産加工等の実習をする。第四の強調点は塾風教育であり，日本昔時の塾教育の精神を汲み，師弟が起居寝食を共にしながらの人格接触を通しての教育を重視する。第五は，自給自足であって，農場の合理的経営により本校経費の自給自足を期す。第六は拓植教育であって，たとえば，山形の秀峰葉山の中腹にある附属大高根分場は開発開墾，拓植教育に恰好な道場である。第七は晴耕雨読である。現代教育の通弊は学科を徒らに細分して統合を欠き，観念偏重，記憶万能の教育であることである。本校の教科は力めて合科主義に則り，迂遠な教室講義をすて，実習体験を主とし，実習即教授，実習即教室とする。従って特に学科を主とするのは冬期農閑期だけだとしている。

更に，日課をみると，午前5時太鼓の合図で起床。人員点呼。禊。日本体操。武道（直心影流法定型）。藁打，家畜手入，草刈等。7時30分朝拝——国旗掲揚，二拝，二拍手，一拝，君ケ代合唱，勅語奉読，天皇陛下弥栄三唱。二拝，二拍手，一拝，朝の挨拶。8時30分より日没まで終日実習（季節により学科）夕食後，各自自習，武道，講話，研究会，懇談会等。9時礼拝，9時30分消灯である。

友部（後の内原）の国民高等学校においては，同様の原理に立ちながら，生徒を5つの部を設けており，第1部は長男教育，第2部は次三男教育（将来拓地殖民に従事する者を養成）第3部は少年教育，第4部は女子教育，（農家の主婦）——以上各1カ年間——及び，第5部は短期講習である。

教科課程及び教授時数（毎週）

教科目	第1部（長男教育）		第2部 次三男教育		第3部（少年） 第1年		第3部（少年） 第2年		第4部（女子教育）	
	課程	時数	課程	時数	課程	時数	課程	時数	課程	時数
修身	皇国精神及取農村経営	5	皇国精神及農村経営	5			皇国精神及農村経営	5	皇国精神及農村経営	5
地理歴史	一般	2	一般	2			一般	2	一般	1
国語	一般	1	一般	1	講習 読作文字	4	講習 読作文字	3		
数学	珠算	1	珠算	1	算術代数	4	幾何三角 珠算	4		
農学	農業綱要	12	農業綱要	12	農林学大意 理科大意 農学実験	13	農林学大意 理料大意 農学実験		農業綱要	6
外国語	——		初歩	2	初歩	4	初歩	2	初歩	1
武道	剣道	3 (10)	剣道	2 (8)	剣道	1	剣道	2	武道講話	2
体操	日本体操	2	日本体操	1	日本体操	1	日本体操	1	日本体操	2
教練	一般	3	一般	3	一般	3	一般	3	——	
家政	——		——		——		——		料理看護育児教育裁縫洗濯等	14
音楽	——		——		——		一般	1	一般	1
農場実習	（農場実習時間ハ時期ニ依リ一定セザルモ各部共最モ之ニ重キヲオク）									
殖民	殖民ニ必要ナル学科及実習（第2部ノ生徒ニ対シ随時之ヲ課ス）									
視察旅行	（卒業間際ニ於テ内地満鮮旅行ヲ行ウ）				内地旅行		内地旅行		内地旅行	
計		28		29		30		30		28

国民高等学校の教科課程は上の表の通りである。これによっても明らかであるように，学習は皇国精神，武道，農村経営，農学（農業綱要）の他は主として農業実習（女子は家事一般）に重点がおかれ，知的学習は最低限

にとどめられていることに国民高等学校の教育の特質が見られる。

加藤の持つ農民教育，農村形成のイメージに基いて計画され，組織された日本国民高等学校の教育内容を検討してみると，デンマークの国民高等学校と似ていながらも，幾つかの重要な点で異っていることを発見する。デンマークにも多種多様な国民高等学校があり，その特色は一概には云いがたいが，智育を第一におく普通学校と異って，キリスト教信仰に基いて，人格を養成し，人間の崇高なる精神を鼓舞し，高い人生観，世界観を与えることを凡ての国民学校が本来の目的としていることは事実である。しかも，それは狭い視野における精神教育ではなくて，グルンドウィッヒ以来，授業科目中，歴史と文学とが最も主要なものであることは伝統化していた。歴史教育は，世界史上の大著述を参考書にしつつ，史学が提供する豊富な材料を批判し，綜合しつつ歴史の意味を学び，しつかりとした世界観を持つようになることに重点がおかれている。また，従来の学校の形成的な死せる知識のつめこみに終るタイプの教育を批判したとは云え，国民高等学校は文学，詩歌の研究の外に，近代の学問，自然科学，（数学，物理等），政治学等をもその教材に入れるのみならず，生徒をしてこれらの智識を練磨せしめることの重要さも強調している。これらは那須皓の訳した『国民高等学校と農民文明』にも詳述されている。デンマークの国民高等学校の最も重要な伝統というべき，こうした liberal education の伝統は，加藤の国民高等学校には全くといっていいほど継承されていない。その精神の鼓舞，確固たる世界観の確立ということのみは，古神道的日本精神（農民精神）をもって代用されているのである。また，彼が訪問した多くの国民高等学校のうちの一つの小農学校で，「将来行くべき道と確乎たる人生観の確立を得せしめんと努むると同時に，男子に対しては農業経営上必要な知識技能を，女子に対しては小農の主婦として是非共知って置かねばならぬ，家政上の知識を授けんと努力している」[22]ときくと，「これは吾等日本人にとって一考する価値がある」と感心しており，むしろ，こうした内容が日本国民高等学校に生かされていることを発見するのである。また，デンマー

クで国民高等学校の校長は，「吾々は小農の指導者ではなくて，彼らの僕(servant)だ」ということには加藤はむしろ反撥しており，「指導者」と繰返し強調しており，こうしたデンマーク精神よりもドイツ国民の「祖国の為めに」の一語にすべてのものが結集する愛国の至情に燃えたドイツ魂に深い感動と共鳴とを覚えている。そして，日本国民の現状を憂え，この日本国民を救済する唯一の道は，大和民族惟神の理想信仰を血の出る様な肉体的労働によって鍛錬陶冶するに限ると信ずると彼の旅行記『滞欧所感』に書いている。彼は，デンマークの国民高等学校にヒントは得たであろうが，彼国に学ぶよりも，むしろ，加藤自身の発想，イメージの投影をうつし出す事にのみ共鳴を覚え，帰って来たのではないかと思えるのであって，日本国民高等学校の教育は，実に加藤の独創的，独断的農民道場だったと云ってよいのではないかと思う。

加藤はこうと考えたことは誰にも相談せずに，実行にうつそうとひたむきに突進するワンマンぶりであり，こうした教科内容も彼の独断で決定されており，更に，農民は農産物を作るだけでは駄目だ，自分の手で売り，その上，料理までして売らねばならないという考えが浮ぶと，販売斡施所をつくったり，神田に料理屋をはじめるといった状態で，経営には全く無頓着だった。このために国民高等学校の経営は赤字の連続だったようだが，理事長（農林省農務局長）の石黒忠篤が時の日銀総裁井上準之助に懇願して個人的に2千円貸してもらったり，また，石黒自身，月給以外のものは，ボーナスも何もすべて封も切らずに国民高等学校の経営費にまわしていたということである。(20)

友部の日本国民高等学校が内原村に移転したのは昭和10年のことである。友部よりも広い農林省山林局の所管に属する内原村の土地の交付を受けることとなり，後述する満州移住協会の分と合わせて279町歩という広大な土地を所有する内原の日本国民高等学校，満州農業移民を教育する「内原訓練所」はこのようにして準備され，建設されて行つたのである。

それでは，内原における日本国民高等学校がどのようにして満州開拓事

業と結びつき，加藤が移植民運動の推進力の役割を果してゆくこととなったのであろうか？

4　満州開拓団・青少年義勇軍の課題とその行方

a．土地なき農民に土地を

——満州農業移民を推進したもの——

加藤完治は，その著書『日本農村教育』の中の「殖民は教育の延長」という項で彼が何故このように殖民問題に熱心であるかということについて次のようなことを語っている。彼自身が教えた生徒たちから卒業式の日に泣いて訴えられたことは，「先生のお話は能く分りました。それで飽までも自分は日本農民として立ちたいと云う決心がつきましたけれども，私は小作人の子供でありまして，耕す土地もありませぬ。家から資金を貰うことも出来ませぬ。私は農業が出来ないのではない。腕はあるし，何とかしてやりたい。先生のお話を聞いて茲に自分は農業をやりたくなったけれども，何処でやるのですか」ということであった。(24)

日本の耕地面積は極めて狭少であり，世界無比の集約経営を行っており，農家1戸当平均耕地面積は1町歩余に過ぎない。しかも之は北海道の耕地が加算してあるからで，北海道を除くと平均9反余にしか当らない。(25) しかも，土地なき小作はは全国で農民の26%，自小作は42%（自作農31%その他）であり（昭和8年現在）5反未満の百姓は34%，500万人（100万戸）であった。自作農創設を目ざす石黒忠篤の新農業対策としての自作農地法も，その意図の真実さとはじめのプランの積極性にもかかわらず，実施にまでたどりついてみると，結局のところ，地主を救済し，耕地価格の下落を防ぎ，あるいは騰貴を促すにすぎず，農村恐慌のきびしい現実も重なって，小作・貧農の問題は深刻度を増すのみであった。

こうした現実を背景として海外視察旅行をした加藤は1戸当りの耕地面積が，農業が世界一と云われるデンマークでは15町歩であり，イギリスでは80町歩が適当と考えられており，アメリカでは200町歩を合理的な農業

経営の目標としていることを発見して驚いた。帰途，シベリア鉄道でウラルを西に越えて帰って来た時も，「欧洲の一倍半という大地積を抱えながら，人口1千万足らずのシベリア」におどろき，「この天然資源を彼等(スラブ民族）に任せて置くのは実に勿体ない」[26]と考える。そして，土地は神が人類に与えられたものであるにもかかわらず，その土地をこのように独占している国があるから，一方に於て饑えこごえる人間がいるのだ。これはどうしても世界に向って土地解放の大運動をやらなければならぬと決心して帰国したというのである[27]。この頃から加藤は国際的社会主義ともいうべき土地再分配の思想を強く持つようになったらしい。そして，帰国後，3，4カ月を経て，加藤は，朝鮮，満州，内蒙古の奥まで乗り込んで行って，内地の青年を殖民させる場所はないかと探し歩いた。広大な土地はあるが生命財産の保障がない。「残念ながら，満蒙の天地は今は，殖民に不適当であると考えられたので，仕方がないから満鉄沿線附属地とそれから朝鮮の空地に内地人を植え付けよう。相成るべくは，鴨緑江の沿岸に内地人を植え付けて，ぢりぢり押しに鴨緑江を突破して行こうと云う考えを持つ様になった」と云っている[28]。

このように，加藤にあっては，農民教育→小作の子弟に耕作する土地なし→土地獲得の必要→他国の空いた土地に移植民——と云った単純な論理の運びによって，彼の農民教育の必然の帰結が満蒙への移植民となった。ことに農家次三男の進路には満蒙が最も良いと信じるにいたるのである。加藤は，こう確信するや，各方面を熱心に説得して，積極的な満蒙移民運動を興してゆくのであり，彼はやがてその中心となり推進力となってゆくのである。

加藤の親友で満州農業移民事業の協力者であった京都帝大農学部教授橋本伝左衛門は，『満州農業移民十講』の中で次のように語っている。「農村の青年を教育し，そうして立派な青年に仕上げて見ても，それ等の働く場所がない。それ等の人の働く場所を与えなければ，折角教育しても目鼻がつかない。そこで何んとかしてこれ等の青年に活動の天地を与えてやり

たい。…これは是非大陸に発展しなければならぬ。今日でこそ誰でも満州々々と言いますが，加藤君はこれを満州事変の10年も前に考え出したのであります。[29]」

もっとも，加藤にも国内的に土地制度の改革による小作問題の解決を計ろうとする発想が全くなかったのではない。酒田の本間家を訪れてこの家の土地をすべて百姓に分ち与えなさいと云って「加藤は赤だ」という噂がたったことがあると加藤氏自身が筆者に語っている。しかし，一度こうと考えたら，誰が反対しても，八方を説得し，万難を排して直行実践する加藤にして，国内の土地解放のよびかけが起っていないことを考えると，これは加藤の農民の土地問題の解決における基本的関心ではなかったと見てよいのではないかと思う。その点，石黒の方が，その方法は不徹底であったにせよ，自作農創設のプログラムを具体的に立て，農林省の政策として実施しようとするだけの現実的，合理的思考の持主だったと云っていいであろう。

また，我が国の建国の基本を大地主義，農本的国土主義，兄弟主義，勤労主義におき，農民生活の保護救済を叫び，同時に，農村共同体の管理下に農地をおき（国家は一度誤ると大地主の最悪の性質をおびるとして土地国有論はとらない）小作農をして家族的独立小農たらしめるなどの案をかかげていた橘孝三郎，長野朗らの農本主義団体（愛郷会をはじめ，農本聯盟，自治農民協議会等）[30]にしても，また，農村問題解決に，小作地の国有化，地主対小作人の関係の消滅，農民の耕作権の確立，米価，繭価の安定，地主本位の金融制度の改革などをうたっていた国家社会主義団体（赤松克麿，小池四郎，平野力三らの日本国家社会党，その他）[31]にしても，その右翼団体，国家主義団体としての一君万民的皇道主義，および，大亜細亜主義，および，国防上の関心からの満州移民の強調などにおける加藤の皇国農民主義との共通性にもかかわらず，農村問題の解決策としては，彼らの方が加藤よりも革新的なプログラムをかかげていることは興味深い。

以上のようにして，加藤は，耕地面積の少い，貧しい日本農民に土地を

与え，失業問題を解決つけるためにも，唯殖民の一途あるのみ，これは農民の生存権の問題だと云い，更に，北満の警備をかため，日本の礎を固めることにもなると主張して，「加藤は拓務省の役人か」と云われるくらい熱心に満蒙殖民運動を提唱し，推進して行ったのである。

ここで，日本人による満州開拓の沿革をたどって見よう。小平権一の『石黒忠篤』伝によると，昭和6年9月の満州事変より遙かにさかのぼって，大正3年より6年にかけての南満州鉄道株式会社実施の除隊兵移民，大正4年の関東庁の愛川村移民，昭和4年より6年にかけての大連農事株式会社移民などが行われたが，土地取得の困難，所有権の不確実などが原因で，成績は上らなかったと云われる。ところが，昭和6年9月，満州事変勃発後，満州国が創建され，情勢が一変した。

当時の拓務省の立場は次の文章に明らかに示されている。

「日満の関係は政治，経済，国防上一体不可分となり，文字どおり共存共栄隆替を一にするに至った。従って満州国の発展は即ち我が日本の発展にして，満州国を育成し，更に発展せしむることは実にわが日本の責務たり，重大使命となるに至ったのである。而して此の日満両国の関係を実質的に強化し，其の建国精神たる民族的協和を実現し，王道楽土を建設するためには我が大和民族が多数彼の地に移住し，殊にその農土を開発し，満人其の他の民族と相提携し，其の中枢たる地位に立ってこれを指導啓発することが絶対に必要であり，斯くすることによって満州産業の開発を促進すると共に，其の文化の向上，国防の充実に対しても多大の貢献をなし，他面又我が農村漁村の更生，食糧の増産等にも寄与することを得る。(32)

しかしながら，満州移民が国策となるまでには，背後に加藤完治らによる民間からの強力な働きかけのあったことは注目すべきことである。蛇足のようではあるが，加藤を中心にして満州移民へと世論，学界，および，国策をむけて行ったプロセスをたどってみることとしよう。先づ，昭和7年1月2日，加藤は山形県から出て来た予備役の角田中佐から満州移民に反対の陸軍省を説得してくれと云われ，満州農業移民に対してはやる心をおさえかねていた時だけに，さっそく二人で陸軍大臣荒木中将に面会を申込んだ。電話を受けた副官が，加藤寛治大将と思い込んだことによって荒木陸軍大臣に逢うことの出来た加藤は熱弁をもって満州移民を成功させて

みせると説き，遂に荒木に満州移民に協力するという約束を得ることに成功した。加藤は，在郷軍人から移民を募集し，訓練した上で送り込むこと，これらの移民の募集と訓練との仕事は日本国民高等学校で引受けるから，陸軍省では移民に必要な旅費や建物の借入れ代金などの資金と，軍医と土地とを準備してほしいと要請した。荒木は加藤の申出を巻紙に筆で書きつけて快諾したという。(33)

当の荒木貞夫氏はこうしたことは全然記憶していないと云う。しかし，荒木氏が筆者に語ったところは，当時の満州には張学良の約20万の軍隊が排日を目標にしており，それに対して関東軍は約1万人，しかも，いざという場合に動員出来る兵力は約5000人であったということ，昭和4年，荒木氏が陸軍大学の校長時代，50～60人の学生をつれて満州視察に行った時，奉天城外約8キロのところで経験したことは，百姓はにわとりを盗みに来た男を叩き殺して道路に放置しており，3日もすると野犬がきれいに片づけると平然と語るといった無秩序さであり，日本人は奥地は危険で，満鉄沿線にすべて引揚げて来ており，何とかしてくれという居留民の訴えが強かったということ，更に，満州事変（昭和6年9月）にしても，関東軍が現地でやっていることで，昭和7年1月頃は，陸軍大臣でも本当は何が起っているのかさっぱりわからなかった。しかし，この事変で日本国民の満州への関心が異常に高まり，陸軍の名声があがったため，これを嫉視した海軍が上海事変を挑発して（中国の暴徒をつかって日本の日蓮宗の僧2人を殺させた）起したということ等であった。これらの諸点を考え合わせると，軍当局は，軍隊の外に，加藤の訴える民間からの武装移民を送りこむことは，関東軍が満州で占拠した日本の権益の確保のためにも，また，日本国民の満州への関心を更に高めるためにも有効な試みと考えたであろうことは容易に推察出来るのである。

加藤より荒木陸軍大臣を説得したという話をきいた石黒忠篤は，直ちに東大の古在由直総長を訪ね，荒木大臣の場合と同様に移民問題について説得して来るように加藤に誘めた。その結果，農学部の学生であった頃から

加藤を人間的に信頼していた古在総長は，これまで満州移民に反対であったが，加藤を支持する立場にまわり，全国の官立五大学から移民問題についての賛否両論の学者たちを古在総長の名で招き，学士会館において満州移民論をたたかわせる会を開いた。加藤にも所信をのべる機会を与えた。この日の講演会のあと，全国の大学の強硬な反対論者をも含めて代表的教授たちが満州移民賛成論に傾いたと云われる。

第三に，昭和7年1月，関東軍特務部主催で満州の産業開発，移民等を如何にすべきかを審議する会議が奉天で開かれ（当時は本庄司令官の時代であり，板垣征四郎特務部長の下にあって石原莞爾少佐が日本と中国との協力の大切さに対する信念をもって世話役をしていたという。），那須 皓，橋本伝左衛門の両氏は招かれて列席した。そして移民に疑問を持つ関東軍当局に対し，石黒忠篤，加藤らの考えをも代表して，二人は極力，満州移民の必要を力説したということである。更に加藤の熱心な働きかけによって，昭和7年の春，関東軍から北大営（満州事変に於て一番先に日本軍が取った所）を借りて，加藤の日本国民高等学校の分校を作り，内地から元気な青年を送って満州移民の中堅になる人物の養成を始めることとなった。当時，大蔵省（高橋是清蔵相）は移民に強硬に反対であり，費用を出すことには消極的であった。

しかしながら，満州への関心が更に高まり，この移民運動が盛んになったのは五・一五事件を契機としてであった。この事件の原因の一つに農村の疲弊，行詰りのあることが考えられる時，それを打開する有力な道として満州に農業移民を送り出そうとすることになって来たのである。加藤の努力により，拓務省で試験的に移民を送り出してみようということになり，東北，その他11県の在郷軍人より500人を選抜し，第一次武装移民として加藤が引連れて昭和7年11月に佳木斯（チャムス）附近の弥栄村と永豊鎮とに入植せしめた。この時は大蔵省から費用が出た。そして，永豊鎮に移民団本部を置いた。いわゆる「匪賊」の襲撃にさらされた生命がけの武装移民だったという。そして，昭和8年には同じく在郷軍人中から500人を選抜した第二

次試験移民が千振湖，湖南営に送られたが，「匪賊」に包囲され，移民団は数十日間籠城するということもあり，昭和9年の夏までは非常に危険だったということである。（橋本伝左衛門「満州移民の沿革」)。関東軍の中には楽観論と悲観論との両方があったが，加藤は彼一流のやり方で自分が思いこんだことは人が何と云おうともきかずに断行しつづけた。そして，第一次移民団長山崎芳雄，第二次移民団長宗 光彦らは頭山 満の仲間であった。移民団の定着は彼らの決死的奮闘によるということである。

このような実情をふまえて，関東軍の腹もようやく決り，昭和9年11月から12月にかけて移民会議が開かれ，加藤，橋本（京大)，那須（東大)，木村（九大）らが出席した。加藤と石原莞爾との親交はこの頃より始ったということである。山形県出身の石原は農民の苦しみを最もよく知る一人であったのであり，仙台聯隊長の時，農繁期には兵隊をすべて帰郷させ，わが家の農業を手伝わせたと云われる将軍であっただけに，農民問題ということで，二人は共鳴したのであろう。関東軍当局は，東宮鉄男大尉を中心に，加藤とも協力して現地における移民計画を立てるようになり，移民問題はようやくすらすらと運んでゆく状勢になった。昭和10年秋には移民を促進する民間の団体をつくろうということとなり，拓務省の外廓団体として「満州移住協会」が，同年末には満州拓植会社（俗に「満拓」といい，移民に必要な土地を買うこと，土地の区画，道路の敷設，資金の供給その他を取扱う）も設立された。

以上のように，加藤が中心的推進力となり，軍当局，拓務省，その他を動かして満州農業移民が試験的にすすめられていたとは云え，この移民運動に最も強力なブレーキをかけていたのは，大蔵大臣の高橋是清であった。高橋はどのように親しい者と話していても，移民の話になるとそっぽを向いてしまって受け付けなかったと云われるほど，満州移民には最後まで反対した。当時，国の方針として一貫した国是に立った外交政策にそって平和政策をとり，国防策をもその線にそって立てることを主張し，軍事的侵略をきびしく拒否し，軍事費の削減に大担な努力を傾けていた高橋蔵相[(34)]が，

満州移民事業に国費を出すことを拒否したのは当然と云っていいであろう。

こうした状態にあって，昭和11年早春の雪の朝，二・二六事件が勃発し，高橋蔵相は青年将校たちの襲撃によって斃れたのである。高橋を満州移民の敵と見ていた加藤や橋本らがここでほっとしたことは，橋本の次の言葉に明らかに示されている。「高橋翁は或る意味で国家の大黒柱でありまして，之が斃れたのは金融財政の方面から言えば非常な損失であります。しかし満州移民事業には高橋さんは大なる障壁でありました。本人は善意であっても，結果は国家の進軍を阻害することがある。彼は偉い人ではあったが，移民の方ではトーチカのようなものであった。ところがあの不幸な事件の為にこのトーチカがなくなってしまいました。それで後は移民事業に対する障害がなくなってスラスラ進んで来たのである。」[35]この巨大なトーチカの喪失はやがて日中戦争，太平洋戦争へ日本を爆進させてゆく軍国主義に対する重要な歯止めの一つの喪失を意味したことは云うまでもない。

このようにして，昭和11年8月25日，当時の内閣は閣議に於て，日本帝国の国策として満州の農業移民を決定するにいたった。「苟くも日本帝国の国策となったのであります。その国策に反対する者は今日は非国民だと言って宜しい」（橋本）ということとなったのである。そして，上述のように，土地なき農民（小作）100万戸，1戸当り5人として500万人の大移民を20年間に満州に送り出すという方針が立ち，昭和12年には第一次の計画の下に集団移民5千戸，自由移民1千戸，翌年は1万戸というように末広がりに，国家の財政の許す限り国費をそそいで移民事業を推進してゆくことになったのである。昭和12年度後半期からはは分村計画が全国的に具体化し，宮城県遠田郡南郷村では1000余の農家の内400戸を5カ年計画で満州に送出せんとし，長野県南佐久郡大日向村では400戸の農家の内200戸づつ2回にわけて大日向村をすっかり満州に移そうとするなどの積極的な動きが各地に見られるようになった。[36]そして，終戦迄には満蒙開拓民，並に，青小年義勇隊を含めて約30万人余の移民が満州に移住していたのである。

一農民教育者加藤完治はまさに満州移民の計画者であり，また，推進者で

あった。軍部も国策もそれにひきずられたと云っても過言ではあるまい。

b. 農民教育＝国防としての移民

——開拓団・青少年義勇隊の最期——

加藤はその農民教育によって育成された青年（農民）に農民魂を持って働くべき土地を——という発想から満州移民を必然的帰結として確信し，その実現にばく進したのであるが，それと共に，農民魂を鍛えることは日本魂鍛錬陶冶の方法であり，農民教育は即ち日本精神の確立であるという加藤の基本的な教育思想の必然の帰結は，満州移民は皇国の国威の発揚であり，皇国の生命にかかわる問題であり，国防だということであった。

「我等農民の天職を自覚し，其の天職を果す為めに努力奮闘しさえすればそれでよいかと云うに，まだそれだけではいけない。日本精神，大和魂を鍛錬することが何よりの大事である。即ち日本人として農業の方を受持って，御国の弥栄に一身を捧げることこそ，此の信仰に生きてこそ始めて真の農民，皇国農民となり得るのだ。だから一朝事あれば直ちに鎌を棄てて剣を取って立上り得る農民でなければならない。兵農一致と云うが，当然の事であって，真の農民魂こそ我が大和魂である。」(37)「内地に於て飢えた農民の而かも二男，三男に生れ，土地なき為に生きて行くことの出来ない日本農民が，開拓を待つ満蒙の広い天地に行くのは当然すぎるほど当然である。何処でも空いた土地に行って開拓するのは当り前の事であって，シベリヤでも，満州でも，濠州でも，どこでもよい。それが為に国と国とが戦争するという場合には，敢えて辞する所ではありませぬ。」(38)「困難であろうがどうであろうが，満蒙に発展する以外日本の進む可き道は無いぢゃないか。年々100万の人口が増加する，併もそれを収容すべき土地は無い。…理窟はともあれ，満蒙植民は現在の我等日本に課せられた運命なんだ。…満蒙植民は我等大和民族に与えられた天の命である。只断行あるのみ。」(39)そして，こうした断行を肯定する論理は次のようなものであった。「支那人は使用権を重んじて所有権を蔑にする。故に朝鮮の荒地に支那人が入って，無断

で耕作している，これに対して抗議を申込むと，空き地に入って耕作するのにどこが悪いという感情を持ち，其土地は使用者に絶対的権利がある——という観念をもって居りますが，我々もその精神で満蒙に於いて活動することが大切であります。[40]」

満州農業移民は国防移民だとする考えは，加藤の仲間で，拓殖大学満州農業移民研究会会長であった永雄策郎(教授)の文章に明らかに示されている。

「今や日露の国交は頻りに切迫を伝えられるが，一農家を以ってして，少くも3人の兵に糧食と云えば簡単なるが如くであるが，米穀，味噌，醤油，沢庵，特に野菜の如き寒地冬期に於ける供給至難であるもの，これ等が現地に於て調弁せられる。10万戸の農家が入植せんには，30万人の兵を養い得るのみか，糧食以外の各種の便益をも供与し得る。加うるに，農業移民の入植は，匪賊の生存の余地を無くし，その自然消滅を来すにより，国防上必要であると云うことを意味するなら，吾人は正にその通りであると答えたい。併し斯くの如き機能は，これは満州農業移民が，名称は移民と云うと雖，実は植民であるにより当然の結果であると云わねばならない。[41]」移民は国外に出て行くが，植民は自己と共に国家を運搬する者だと碩学シーレーはその名著『英国膨脹史論』で述べているが，日本の満州農業移民は実は植民であり，殆ど完全に日本を運搬するものであり，国防上の任務を遂行する国防移民だと述べている。

このように，満州農業移民は武装移民であり，屯田兵(とんでんへい) (the colonial troops) の性格を明らかに持つものであり，自由な生産経済活動ではなくて，兵站(たん)食糧の増産，関東軍背後地の治安維持等の国防的任務を負うものであった。従って，その入植地，及び，訓練所所在地は彼らの自由選択によるものではなく，政府によってあらかじめ計画，決定された国防の要衝地帯，あるいは，匪民分離の重要地点であり，東部，北部満州の荒蕪地，無住地帯の国境地方であった。これは，当時の農業移民たちが語るところであると同時に，関東軍司令部の「国境方面に於ける国防的建設に関する要望事項」の「移民」の項にも明記されている。[42] 開拓団，及び，訓練

所には武器が貸与され，軍は専ら対敵行動に専念し，所在地域の治安維持は開拓団の重要な任務だったという（吉崎千秋氏談）。そして，移民の基礎条件としては，①自家労力を本位として耕作し，経済的に成立する自作農を設立すること（満人，支那人を雇わぬこと。彼らは，匪賊に通じる危険があるし，また，日本の人口問題の解決にならないというのが加藤の持論であった），②2～300戸集団として入植せしむること，③身体強健，思想堅固な者を選び，入植前に内地（加藤の内原訓練所）又は現地（内原の分教場）に於て特殊の訓練を施すこと，④農村疲弊の現状よりみて相当程度の補助金を政府より支出すること等があげられている。

「満州国」建設の最高指導者であり，東亜連盟の理想をもち，満州に王道楽土の建設[43]を目ざしていた石原莞爾（彼は，日蓮宗の立正安国会から発展した国柱会の会員でもあった）は，満州国は東亜連盟の精神的団結の基礎を確立すべき使命のもとに建国されたと信じていたが故に，「満州国」を植民地化しようとするあらゆる日系官吏・軍人に対し，彼は猛烈に反抗したといわれる[44]。石原は満人の耕地を開拓移民団が使用することを（たとえ中国人から買うにせよ）断乎として禁じたのであり，放置された荒地にのみ入り，移民自らが開墾することを約束するという条件で加藤たちの農業移民運動を認めたと云われる（加藤氏談）。この点は移民関係者たちや他の軍人たちの要請で，後に加藤が，満人の耕地を買い入れることを許可してもらい度いと石原に話したところ，「約束は守って下さい！」と大きな声で怒鳴られて，とりつくしまもなかったとのことである。その石原が後日，東条によって「東亜連盟は王道を指導理念とする。これは怪しからん。日本は皇道だ」と批判され，「肇国の精神に反する国家連合論」としてしりぞけられ，やがて石原は予備役に編入されてしまうという変化が満州の指導理念に起ったことは周知のことである。

しかしながら，当初は，上記のような思想に立つ加藤と東亜連盟の理想に立つ石原との協調によって満州農業移民が現地では行われたのであり，加藤の日本国民高等学校が「内原訓練所」として2カ月の内地訓練を受け

持ち，更に，現地訓練所における移民たちの「特殊訓練」を依託されることとなったのである。そして，石原莞爾が予備役に編入されるというような関東軍の指導理念の重要な変化も加藤の農業移民活動には何ら条件の変化を意味するものではなかったようである。

このようにして，満州移民は一時の出稼移民ではなく，「遠大なる理想の下に行わるる大和民族の大陸移動」だと云われ，満州建国精神に溶け込んで「五族協和の中核たる大和村を理想郷として建設」する開拓者だという精神をたたき込まれて移民村の建設にあたったのであり，加藤の方式によって農耕につとめ，弥栄神社，千振神社，綏稜神社等，夫々に神社を中心として団結した移民村を建設して行ったのである。そして，それは農業移民に限らない。農林省は林業開拓民の募集をも行っており，「今では満州も王道楽土となり，匪賊の話も昔噺となりました。満州の開発，大陸新日本の建設，何と愉快な仕事ではありませんか」とよびかけた。

更に，各府県主務課，日満帝国婦人会，聯合女子青年団などのあっせんで，農村の乙女たちが「大陸の花嫁」として多数送り出された。

しかしながら，大人の開拓民は加藤が思うほど単純に彼の農民魂，即ち，大和魂の皇国農民観に立った烈しい労働による日本精神の鍛錬陶冶の教育主義に従うものではなかった。私有の土地を持つ自作農になれるということに唯一の望みと期待とを持って開拓団に加つて来た農業移民たちの関心は物的条件の充足であり，身の安全であり，更によりよい生活の確立であった。彼らが加藤の一途な精神主義についてゆけなかったのは無理からぬことであった。

これら日本の貧農たちの心の底にあるねがいに耳を傾け，それを正しく導くと共に，最も合理的，建設的に実現する道を彼らと共に問うというよりも，彼自身の堅持する信念に基づいた教育目的，自らが画いた具体的目標の達成に邁進すること以外に道を知らない，「純情」ではあろうが，主観的，かつ，独善的な加藤は大人の開拓移民は利己的，かつ，物慾が強くて駄目だと思うにいたった。そこで彼は，16～19歳の純情な青少年義勇隊を

編成し，満州に送りこもうと考えたのである。

「満蒙開拓青少年義勇軍」を国家の新事業として実行することとなり，大谷拓務大臣が提出した予算が承認されたのは昭和12年11月30日の閣議においてであった。そして，追加予算によって昭和13年度内に3万人の青少年を満州に送ることとなったのである。青少年義勇軍の応募には宣伝を何段構えにも立てて全国的に大がかりでよびかけた。応募資格は16～19歳の身心共に健全な青少年であり，志望者を各県で体格検査と簡単な口答試問の結果採用した。第1期を締切ってみると9950名の多数であった。1万人の義勇軍を収容する用意を整えた茨城県の内原訓練所に合格者を入所させ，各小隊，中隊に編成し，簡素を旨とした衣食によって，一切を自分の手で行う自治的な共同生活をさせる。訓練生は中隊長を中心に朝の礼拝，学科，教練，武道，農耕作業と毎日規律正しい生活をし，厳格な団体訓練を受け，それを二カ月以上続け，義勇軍たるにふさわしい訓練によって渡満の準備をする。「やまとばたらき」と称する内原訓練所特有の皇国体操も評判になった。ことに軍事教練は自衛の必要から本格的訓練が要求されていた。まさに片手に鍬，片手に銃という開拓民の訓練だったと云われている。

渡満に際しては制服，リュックサック，食器などの支給を受け，壮行会後，東京に出，二重橋前で宮城を遙拝，明治神宮，靖国神社等を参拝して固い誓いをもって渡満する。満州では「我等義勇軍ハ，天祖ノ宏謨ヲ奉ジ心ヲ一ニシテ追進シ身ヲ満州建国ノ聖業ニ捧ゲ神明ニ誓ッテ，天皇陛下ノ大御心ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス」という義勇軍綱領の精神に則り，生活訓練，教学，農事，軍事，武道，特技訓練を通じ，3カ年間の訓練を受ける。（大訓練所で1カ年，小訓練所で2カ年。43カ所に基本訓練所，特別訓練所があった。）

現地訓練の課業は，作業（開拓，農耕，養畜等農事一般，及び，土木，建築等）軍事教練，学課（公民，自然科学，農事，満州語等）の三つであるが，ここでの集団生活を通して，協力一致，艱難辛苦を乗り越えて，開拓建設の理想に向って邁進する不撓不屈の精神を鍛練陶冶するという精神

訓練に主眼がおかれていた。[45] このようにして，現地訓練が修了したものは原則として政府の補助金を受け，建国農民となり，1戸1町歩の耕地と若干の団共有地を有する農村を作り，安定した生活が出来るということになっていた。郷里出発から現地訓練修了までに必要な費用は一切政府で負担した。昭和13年にも，昭和14年にも3万人づつ編成して北満各地に送りこまれており，昭和15年春には，青少年義勇軍は，現地訓練所に約3万人，内原訓練所に約1万人いたと拓務省関係の報告には記録されている。[46]

青少年義勇軍が当時の全国の少年たちにこのようにアッピールしたのには，政府の積極的働きかけと地方自治体，学校当局等の協力とが力をなしていた。全国開拓民自興会（吉崎千秋会長）の「陳情書」はその間の事情を次のように記している。

「勿論過剰人口に悩む当時の日本農民，並に，農村の青少年等は，満州に土地を求め，安定した自作農たらん為に当時の重要国策として政府が決定奨道した20ケ年100万戸移民計画に応じたものであるが，これは純然たる本人の自由意志にもとずくものとして形式的に処理すべきものではなく，むしろ政府，府県，町村の誘導によるものと解すべく，特に青少年義勇隊員の募集にあっては当時政府は興亜教育指導者の指定，郷土部隊編成の指導を行い，その所要員数は小学校へ割当て募集により確保せられたものであり，小学校卒業時の幼齢なる彼等青少年の渡満は，自己の自由意志にのみ基づくものと云い得ないことは疑う余地のない明らかな事実である。」[47]

多くの場合，各地の小学校は，当局からの指令もあり，上位10番までの最も優秀な生徒を選んで推薦したと云われている。

青少年義勇軍の少年の1人，菅野正男君の書いた『土と戦う』（昭和15年1月1日，満州移住協会）は，少年拓士の先駆者として気負った300名の一団が昭和13年4月，嫩江開拓訓練所に入所してからの厳冬，酷熱，疫病，と闘いつづける少年たちの生活記録であるが，これに厳冬の中で粉雪と共に寒気がまいこんで骨も凍らすアンペラ張りの小屋しかない宿舎に入れられ，黄色い濁った水，食事は粟飯と昆布汁だけ，しかも，満州独特の吹雪

の中での礼拝，日本体操（やまとばたらき），行軍，材木運搬などの烈しい労働と云った生活の中で，大部分の少年たちは健康をそこない，ことに痔を患う者が多く，便所は血の海と化すと云った酷しい生活がつづいた。「屯墾病」と云われる憂うつ症にかかり，健康をも害し，どうしても帰国したいと歎願する少年がいても，この仲間の1人が欠けた空げきは他の1人ではうめられないからと指導者より説得され，少年たちは励ましあってけなげにも頑張りぬく姿は涙ぐましい。加藤の精神主義的教育思想は，人間的可能性を遙かに絶した北満の荒野の，非人間的な現実にこれら純情な少年たちを何万人と送り出して行ったのである。この『土と戦う』を書いた菅野正男君もやがて健康を害し，北満の野に青春を待たずに死んで行った一人である。

しかし，開拓団，青少年義勇軍には更に残酷な運命が待っていた。大東亜戦争の進展に伴い，彼らに対する国防的要請は更に強化され，終戦直前に至り，男子の大部分は根こそぎ動員されて軍務につき，青少年義勇隊員の多くは関東軍の臨時軍属として兵器廠，貨物廠，その他全満の軍需工場に動員された。関東軍は敗戦の一年前に家族を飛行機で日本に送り帰しておりながら開拓団には何ら通告をせず，敗戦直前には関東軍自体，開拓団，青少年義勇軍を北満の辺境の異民族の中に置き去りにして無責任な無警告退去を行ってしまった。昭和20年8月9日，ソ連軍の戦車はこれら開拓団の村々を目ざしてばく進して来たと云われ，多数の婦女子，老幼青少年がソ連軍，立ち上った満州人らに襲われ，大量虐殺された。多くの少年たちが土壁により，レンガを片手に襲い来る暴民と闘って無惨に死んだと云われる。生き残った者も病気と飢餓に広野の夜露の上に母子相擁して消え失せた。「全国開拓民自興会」の記録によると，終戦当時の満州開拓民，並に，青少年義勇隊員の在籍者総数27万余人（会長吉崎氏談によると実数は約33万と見られるとのこと）であったが，母国にたどりついたものは14万9千人，未引揚者，及び，未調査者5万6千人，死亡者は約8万人である。在満邦人の14%に過ぎない開拓民が，満州における日本人犠牲者の50%を占めていることが，いかに無防備な悪条件の下に置かれたかを物語るもので

ある。

私は少し詳細にわたりすぎるまでに満州開拓団・青少年義勇軍の課題とその行方とをさぐりつつあとづけて来た。それは，加藤完治という一人の皇国主義的ナショナリストである教育者の思想と実践とが，ある特定の歴史的状況にあっては，どのような役割を果し，どれほど多数の人間をどのように巻き込んでゆくかの事実を見とどけたかったからである。

最近内原に加藤完治氏を訪ねた筆者に対して，氏は，以上見て来たことと本質的には何ら変らない農民教育思想を熱心に語りつづけ，ヒットラー，ムッソリーニらの農村問題解決の方法を称賛した。そして，開拓団・青少年義勇軍に対しても，自分は誠意のありったけをもってやったことであり，何ら後悔をしていないと語るのであり，主観的誠実さの客観的結果に対する良心の傷みの不在は驚くばかりであった。

5　加藤の農民教育思想の問題

——国民高等学校運動の史的位置づけ——

以上のような加藤完治の教育思想・国民高等学校運動は，日本の教育思想史においてはどのように位置づけられるであろうか？　これは一見，デンマークの国民高等学校を移植したものであるかのように考えられているが，加藤完治の教育思想を軸として展開して行った日本の国民高等学校は，上にも既に述べたように，デンマークのそれとは，教育理念においても，また，教育内容，方法においても異質の，加藤式の農民教育思想であり，実践であった。近代日本の教育思想史におけるその特質を他の諸思想との関連において考えてみることとしよう。

第一に，農村の中堅人物の養成を最初の目標としてスタートした国民高等学校は，明治末年より大正期にかけて内務省を中心として展開された地方改良運動＝国民道徳運動の課題を担うものであった。地方自治体を底辺からささえ強化してゆく農村中堅——村落共同体の再編強化の課題を主体

に受けとめ，農村経営を指導出来る人物の養成が求められていた。それは田沢義鋪の青年団運動にとっても共通の課題であった。それは，重なる恐慌，凶作などによって農村窮乏が激化する中では，上記石黒農林政策の車の両輪においても明らかなように，更に切実な課題と考えられていた。こうした国民道徳運動，あるいは，石黒農林政策の農民精神作興の側（他方は土地制度の改革）において共通に見られることは，日本の伝統的宗教・道徳思想の復活，援用であった。それは，内務大臣主催による神仏基の三教会同（明治45年），二宮尊徳の報徳会，修養団の白色倫理運動[48]（蓮沼門三は井上正鉄の禊教（みそぎきょう）の信者で惟神（かんながら）の道を信ずる神道系の修養主義者），本稿において取扱って来た加藤完治の 筧 克彦的古神道主義などにおいて明らかである。加藤完治においては，この故に農民精神作興は皇国主義と直結して行く要素をはじめから持っており，それは後に超国家主義とも何ら矛盾を感じない要素として重要な内的要因をなしていた。

第二に，それにもかかわらず，国民高等学校運動は大正期新教育運動と幾つかの点で興味深い共通性をそなえている。明治末期より大正期にかけて展開した新教育運動は，学校が注入教育に重点をおき，暗記と試験とによる受動的な学習の場所となっている公教育の批判，教育と生活との分離，知育偏重（真に合理性を養うような智的教育が充分になされていたわけではないが）等への批判をもってはじまっており，公教育の制度，カリキュラムの否定（時間割なし）となり，小クラスによる自然の中での自動教育，労作教育，作業教育等が重視された。強調の置き方にはいろいろ相違があるとは云え，成城小学校（沢柳政太郎），玉川学園（小原国芳），自由学園（羽仁もと子），明星学園（赤井米吉），児童の村（野口援太郎），豊明小学校（河野清丸）等の新しい私立小学校にも，また，新教育に関心を持つ全国各地の師範附属の小学校においてもある程度，共通に見られた現象であった。これは，文部省の指導のもとに一定のワクをもって成立して来た公教育の教育理念と形式（方法）とに対する一種の教育のアナーキズムともいうべき様相を呈する下からの自由主義的，民主主義的運動とも見られた。

大正デモクラシー・ヒューマニズム運動と同様，昭和期の軍国主義的ファシズムに対しては無力であり，直には実を結ぶことの出来ない運動ではあったが，人間尊重思想を内在させていた。こうした新教育運動のある特質を，国民高等学校運動は形式的にはある程度担っていたと見られるのではなかろうか？　文部省管轄外に農林省の開明的官僚と地方自治体と民間人との協力による農民道場を創設し，カリキュラムを無視しての合科主義，自然の中での労作教育を実践している。ただ，この農民道場としての国民高等学校においては，苦しい労働そのものが尊重されるのであって，新教育運動の労作・自働教育の理念とは全く異質である。また，少人数の生徒が教師と起居作業を共にしながらの人格的接触による全人的教育ということも，生徒一人一人の自発性を大切にはぐくみ，生徒の自我の発達を助長する助力者としての教師という理念においてではなく，まさに教師中心主義であり，教師の指導精神で一定の方向に全生徒をひっぱってゆくという全人教育であった。従って，その教育理念と理想とにおいては，自由主義的，ないし，民主主義的理念に基いた新教育運動とは異質であることはいうまでもない。ただ，形式，方法上にある共通性が見られることは興味深い。これは，国民高等学校運動が時代思潮を投影させつつ，それを自らの教育目的に利用して行ったものとも見ることが出来よう。

それと共に，新教育運動の中でも，その先駆とも云うべき樋口勘次郎の国家社会主義的教育思想に見られるような，社会有機体説，及び，社会ダーヴィニズムを理論的根拠とし，従って，社会を単位と考え，社会のために個人の犠牲を要求し，更に，帝国主義的日本を担うに足る強い人間の育成といった発想，ないし，人間観が加藤の国民高等学校には濃厚である。また，少人数のクラス編成ということも，「日本昔時の塾教育の精神を汲み」といっているように，松下村塾，その他の塾的教育理念，師弟関係が重視され，継承されている。そして，こうした傾向は，当時よりその後の日本の教育史の中で，安岡正篤を学監とする金鶏学院（儒教を中心として東洋聖賢の学を修む）をはじめとする日本農士学校[49]——その関係者で各地

に塾風教育を興す人々あり，大阪農士黌（大阪府泉北郡陶器村），大阪金鶏書院（大阪府豊能郡箕面村），三間村塾（愛媛県北宇和郡三間村）等々――にも見られると共に，橘孝三郎の愛郷塾，静岡県吉野村の山内塾等をはじめとする多くの農村塾，更に，農村のみならず，大川周明の大学寮，満川亀太郎の興亜学塾，平泉澄系の青々塾，松柏塾（両方とも東大の学生）等々国家主義団体の塾型集団[50]にも展開して行っていることは顕著である。

第三に，加藤らによって創始された山形県立国民高等学校がその綱領に「学園全体を以て理想的『新しき村』を建設経営せしめ…」とうたっているように，白樺派の一つのユートピアニズムとしての「新しき村」運動が加藤独自の問題意識で受けとめられていると思える。明治末期よりはじまった西田天香の「一燈園」（明治38年）にせよ，武者小路実篤の『新しき村」（大正7年）にせよ，また，ガンディの「トルストイ農村」（明治43年，於南アフリカ），「フェニックス村」(大正4年，於インド）にせよ，トルストイの影響を受けていることは明らかであり，宗教的真理探求の修養道場であると共に，そこには，精神的にも物質的にもすべてを共有する新しい社会としての一種の共産社会を建設しようとするユートピアニズムが見られる。青年時代よりトルストイの思想に傾倒し，農村から貧民をなくするにはどうすればよいかを熱心に考えたという加藤に「新しき村」が共感をよぶ課題であったことは容易にうなづけることである。しかも，武者小路の「新しき村」のイメージが現実離れのした空想的な企てであったのと対照して，加藤は，日本の農村の現実をふまえ，そこにおける農家経営，農村経営，組合経営というような，生産，販売，消費の問題を，綜合的に受けとめ，共同農産加工の案を具体的に立て，新しいつながりにある村落共同体形成の課題をも含めて「新しさ村」を経営する方法を実験しようと考えた。そしてそのために，自己献身的農民魂をもって農村を再形成してゆく農民を育成しようとしている。こうした農村の現実をふまえたアプローチの故に，国民高等学校運動がインテリの間にではなく，農民の間に深い関心をよんだ要因であったとも見られよう。それは充分に開明的，革新的

意味を持ちうる要素を内在させていたと見ていいのではないかと思う。そして，こうした要素が，『生活の探求』の著者島木健作らをして内原に住みこもうと決心させる魅力でもあったのではなかろうか。しかしながら，石黒農政の車の両輪のもう一方の土地制度の改革＝農地解放が地主制のぶ厚い壁にぶつかって動かなくなってしまう時，加藤の「新しき村」づくりは皇国主義的精神主義に蒸溜されてゆくと共に，上述のように日本国の外に土地を求めようとする方向に突進してしまったと思えるのである。しかも，農民精神の作興を筧 克彦 の古神道的信仰と世界観とに立って追求していた加藤にとって，皇国主義から超国家主義への接続，展開をチェックする歯止めは何も用意されていなかったと思えるのである。

以上のように，加藤の国民高等学校運動は，それ自体が，大正期新教育運動，ヒューマニズム運動のある要素と昭和の超国家主義のある要素との両方をそもそものはじめから内在させていた。加藤は，表現はどうであれ，その意味内容においては，むしろ目覚めた農民による下からの村づくりを基礎とする国づくりとしての「国民主義」こそ彼の使命と考えていたことであろう。その意味では，ヒューマニズム，ないし，デモクラシーを内在させたナショナリズムとしての「国民主義」の課題が全く不在であったとは云えない。それにもかかわらず，加藤の思想におけるこの両要素の関係は，後者，即ち，皇国主義的国家観が前者に絶対に優先するものであり，後者のためには前者は自己を亡びにいたるまで献身すべきものであった。加藤のナショナリズムは，そうした構造を思想の本質とするものであった。それは，大正期に抬頭する諸々の教育運動の中で，加藤の教育思想――国民高等学校運動――のきわ立った特色であり，それ故に他の諸運動が昭和期には色あせて，衰退（あるいは，かつての特色を失って時勢に妥協）するのと対照する時，この運動は超国家主義の時代を終戦の時点に到るまで，自らの特色において，たくましく生きつづけるのである。ことに，この教育思想において，農民を人間らしくあらせようとする意味での農民教育への情熱と皇国主義とが橋渡しされるという距離を失い，両要素が一致する

ものとして単純に一体化する時，それはおどろくべき実践的エネルギーをもった教育運動となって，日本ファシズムを推進してゆく一つの力となったのである。これは，「国民主義」の可能性を内在させつつ，それが挫折したのではなくて，そもそもの始めから国民主義的可能性がその思想の構造，その本質において挫折してしまい，喪失されてしまっていたタイプのナショナリズムだったと云えないであろうか？

附　　記

戦後，内原訓練所（国民高等学校）をはじめ，全国各地の農民道場（修錬農場）は，連合軍司令部への配慮もあり，軍国調の一掃に努め，名称も「経営伝習農場」と改名された。(昭和24年1月，農林次官通達)。そして，農林青少年のクラブ活動，4H 運動，プロジェクト活動（課題解決)等 のアメリカ式農村青少年運動の様式が採用され，農場生徒の演技を伴うキャンプ大会，プロジェクト発表大会，集団のレクリエーション等，戦前のみそぎ，やまとばたらき等と打って変った教育風潮が全国農村青少年のクラブ活動を風靡した。しかし，そこには，石黒忠篤らの始めた八ケ岳農場，加藤完治の内原日本高等国民学校をはじめ，戦前，戦中の農林省系の農民道場，国民高等学校を土台として，新しい装いをもつたものをも含む54の経営伝習農場が，今日，全国に存在している。そして，「農村青年の郷土建設活動，及び自主的な研究活動の推進を図ること」を目的として，昭和35年4月には，「農村青年研修館設置要領」が公にされ，昭和39年11月現在で36府県に研修館が設置されるに到り，研修団体全国協議会が組織されている。これらは，すべて，文部省系とは区別されるところの，農林省系の農村青少年教育機関である。

更に，昭和37年8月には，全国農村青少年教育振興会（社団法人）が設立され，上記，研修団体全国協議会の他に，農村更生協会，農民教育協会，家の光協会，国際農友会，日本 4H 協会などに，更に，産業開発青年協議会，日本高等学校協会，及び，各都道府県も加盟して，10団体によって構成される組織である。(51)

ことに，国際農友会などを母体として，かつて満州開拓移民団の指導にあたった人たちが中心となって，一方には，アメリカ，デンマークなどに西洋の農業技術の習得に農村青年を送る組織（国際農友会，および，外務省の協力による農業労務者派米協議会など）が生れ，既に三千人ばかりを送り出しており（アメリカのカリフオルニア州に派遣されている短期農業労務者が，アメリカの失業者増加のために全員失業したと『朝日新聞』1965年4月3日紙上に報じられたのはこのグループ)，他方，アジア民族の農業技術の指導，農村更生などを目標としてインド，その他の地域

に技術訓練センターをつくり，日本の農村でアジア的農村生活の豊富な経験と高度の農業技術とを習得した指導員による模範農村経営の働きを進めている。最初パキスタンに試験的に送ったのが好成績だったことから，当時の 那須 皓 インド大使，インド当局らの話しあいによって，海外協力事業団（小林中理事長）の仕事として，コロンボ・プランから経費を出し，インドに訓練センターをはじめることとなった。現在，インドのオリツサ州など4カ所にある訓練センターの模範農場は，インドの平均の4—5倍の収穫をあげており，食糧難に悩むインド全国から見学者が引きも切らないとのことである。それは，意気込みだけ熱心で，純情だが，インドの農村の現実に対しては全く無力なケネディの平和部隊のアメリカ青年たちのティームとは比較にならないほど大きな貢献をしているとのもっぱらの評判である。そして，1964年12月19日には，インド政府と日本政府との間で，アンドラプラデシュ，ケララなど4州に模範農場を更に増設する協定が結ばれたとのことであり（『日本経済新聞』1月14日），インドの外に，他のアジア，アフリカ諸国にも，那須 皓氏らのインドにおける救癩病院のような医療センター，あるいは，電気技術，小規模工業などの工業センター等と共に，上記のような農業センターを増設してゆこうとしている。

ここには，本稿に取り上げて来たような，「王道楽土を満州に」という思想，および，「日本の農民に土地を」といった農業移民＝植民思想，あるいは大東亜共栄圏思想等と結合した敗戦前の日本人の農業技術の海外進出と，そうした思想とは一応切り離された「農業技術」のみの習得，ないし，伝達を名目とした戦後の農民，あるいは，農業技術の海外進出との対照が見られる。そして，それは，1枚の楯の両面のように，同じ農業熱心な，そして，同時に，おくれたアジアを高めよう，指導しようとする関心を持つグループの人々によって，満州事変当時から敗戦にいたる時期と同様の情熱をもって，今日もおし進められているのである。

それは，見方を変えれば，真実を傾けて土に取組み，「深耕」といった労を措しまぬ農業熱心と共に，高度の農業知識，及び，技術をもって生産をあげ，アジアの農村を高めよう，豊かにしようとする純情な使命感と情熱とは，あの満州移民運動の中にも，植民地化や大東亜共栄圏の政策とは独立して存在していた要素だとも見ることが出来るのであり，それが戦後は，アジアの後進国に積極的に貢献しようとするエネルギーともなっているのである。このエネルギーは特定のイデオロギーとは別に独立した存在であって，自らが活動するためには，どのような思想やイデオロギーにも結びつくものでもあるように思える。それだけに，日本のこの思想とエネルギーとが何のために，どのように方向づけられて，用いられるかということは，日本のナショナリズムの形成にも，新しいアジアの形成にも重要な意義をもつものと考えさせられるのである。

（本学教授）

註

1. 拙論「青年団教育における“国民主義”の課題——田沢義鋪の人間形成論をめぐって——」，拙著『天皇制思想と教育』（明治図書1964年刊）に収録。
2. 東京帝大農科大学教授矢作栄蔵博士（農政学)のすすめによって那須 皓氏はホルマン著『デンマーク国民高等学校論』を訳出したのであり，矢作教授，その友人鈴木馬左也（住友家総理事）らのあっせんにより住友家の出資によって出版された。（那須 皓氏の還暦記念出版『半生の回顧』34頁)。
3. 「山形県立自治講習所設置ノ議」藤井武全集第11巻 274～279頁。
4. 「デンマークハ其面積2600方里，人口250万ノ小邦ニシテ，之ヲ我邦ニ比ルストキハ，面積ニ於テ10分ノ1，人口ニ於テ20分ノ1ニ過ギズ。而モ1807年以降，対英7年戦争，並ニ，1813年恐慌ノ後ハ国運頓ニ傾覆シ，国民ハ負債ノ増加ト地価ノ低落トニ苦ムコト甚シク，後又1864年独墺トノ戦一敗地に塗ルルヤ肥沃ナルシュレスウィク，ホルスタインノ2州ヲ割カレテ残ス所貧弱ナル荒土ニ過ギザルニ至リ，国民ノ疲弊一時其極ニ達シタリ。然ルニ近時其牧畜業，植林業，産業組合等ノ発達頗ル著シク，往年ノ貧国今ヤ其農村ノ振興ト国富ノ充実トヲ以テ世界ニ盛名ヲ博スルニ至リ，其外国貿易ノ総額ハ我国ノ2分1，国民ノ貯蓄額ノ如キハ実ニ世界第1位ヲ占ムルヲ見ル。其茲ニ至リシ原因ハ尠カラズト雖モ，識者ハ之ガ主因ヲ農民高等学校ノ功績ニ帰スルニ於テ一致スルモノノ如シ。

農民高等学校ハデンマークノ人グルンドウィヒノ主唱ニ係ル。彼ハ近代ニ於ケル北欧諸国，殊ニデンマーク自国ノ沈滞ヲ歎ジ，其原因ハ国民的自覚ノ欠乏ニアリトナシ，地方青年ノ性格ヲ陶冶シ，国民全体ノ文化ヲ高メ以テ国運ノ発展ヲ図ランコトヲ欲シテ，遂ニ農民高等学校ヲ興シ其理想ヲ実現スルヲ得タリ。」（同上「設置ノ議」の内,「其5実例」の項。全集第10巻278～279頁)。
5. ホルマン著，那須皓訳『国民高等学校と農民文明』11～12頁。
6. 日本国民高等学校の設立発起人は石黒忠篤，那須 皓，加藤完治，橋本伝左衛門，山崎延吉，小出満二，小平権一であり，文部大臣，農林大臣連名で許可された。行政整理の対象となっていた国立種羊場のあった場所であり，58町歩の付属農場も与えられていた。
7. 小平権一『石黒忠篤』（時事通信社刊1962年）31頁。
8. 大正13年の「小作調停法」は単に小作争議の調停のみでなく，農民の経済的安定，向上を計ろうとする石黒の情熱にささえられた仕事だったと云われている。また，自作農創設維持規則の原案，小作法案など，数多くの法制の原案を協議作製した。石黒自身，新設の小作課の課長に移って研究員と共に調査にあたり，この仕事に専念した。この課は大学の研究室のような雰囲気で，ティーム・ワークをよくなし，仕事を進めると共に，彼の輩下からつぎつぎと農学博士や大学教授が生まれたと云われる。尚，当時，石黒のもとで働いた芹沢光治良は次のように

語っている。「あの頃，石黒さんは，日本のどんな村の話をしても，自分のポケットのなかのように知っていました。農村から農会の人がきて，いろいろなお話をすると，その人の話を現場でみているように，石黒さんはよくわかっていました。私は，これが男の仕事という事だなと思いました。」（同上，36～37頁）

9. 大正のはじめに現われた土地回収頼母子講はわが国における自作農創設維持施設の最も古いものであるが，大正7，8年頃からは産業組合，町村，府県等で，この事業を行うものが生れ，日本勧業銀行，農工銀行等の資本の貸付けによったものもあった。しかし，融資金額が少ない上に，借入れ手つづきが煩雑，かつ，利子が高かったために，みるべき成果がなかったと云われる。大正11年からは農商務省の要請で逓信省が簡易保険積立金を融通することになったが，土地価格，貸付利率が高く償還年限が短かすぎることなど，欠陥が多かった。

10. 高橋亀吉『大正・昭和財界変動史』中。

11. 長野県内務部農商課編『長野県の不況実情』昭和7年8月刊。

12. 「修練農場の目的」（地方農事試験場および地方農事講習所規定中）は次のように規定されている。

修練農場は，結局真に農業に打ち込んで，百姓をする立派な農民をつくることが眼目である。農村の更生も，終局するところ，個々の農家が真に立派な農民とならなければ，その目的は達成されない。しかも，個々の農家として立派であるのみでなく，更に自ら自家の農家の経営に従事しつつ，よく村民の代表となり，率先更生計画の実行に邁進する中心人物でなくてはならない。農村の中心人物の養成施設は，まさにこの種の中心人物を養成する目的をもって設置すべきものである……かかるがゆえに，その養成の任にあたるべき中心人物には，よく農民精神に徹底した人格を得，相当面積の農場，寄宿舎，農業経営に必要な諸設備等を充実せしめ，しかも，よく地方農村更生の事業と密接な連絡を保たしめることを必要とした。

13. 『加藤完治先生』（日本国民高等学校協会編1965)31～40頁。

14. 加藤完治『日本農村教育』（昭和9年，東洋図書株式合資会社）20頁。

15. 同上4頁。日本国民高等学校協会編『加藤完治先生』（1956年）71～78頁。

16. 徳永徳麿は植村正久の弟子の一人であって，大正2年には巣鴨大学の講師をし，系統神学『基督教の根本問題』を著し，雑誌『基督の徒』を発行するなどの活動をしていたが，当時出版された筧克彦博士の『古神道大義』についての批判を雑誌『新人』第14巻第1号（大正2年1月1日）に書いている。富永があげている疑問点は，筧が古神道は日本民族の普遍的理想だと云い，古神道と日本道とを同一としているが，歴史の進展，人文の開発と共に，宗教をもその一部分として展開して来た日本民族の普遍的理想としての日本道は日本古宗教である神道と同一視されるような小さなものかという疑問，また，本来，日本民族の間に生じた多

時代から朝鮮の京城と元山との間の平康あたりの荒地に加藤によって訓練を受けた青年たちが入植した。その経験が満州移民にどんなに大きな助けとなったかもしれないと。また，大正14，5年頃，加藤と橋本の二人で山形県の農村を廻って歩き，移民をしなさい。農民は移民をしなければならぬ，それが日本国民として一番大事なことだと説いて歩いたといっている。

30. 橘孝三郎『日本愛国革新本義，国民共同体王道国家農本建設論序文，橘氏，愛郷塾及び其他との関係』（昭和10年2月）国民精神文化研究所，同『皇道国家農本建国論』（昭和10年5月），東京建国社。司法省調査課『我国に於ける最近の国家主義，乃至，国家社会主義運動に就て』（昭和10年3月）「E．農本自治主義系団体」参照。

31. 同上，「F．左翼転向派」。

32. 拓務大臣官房文書課編『拓務要覧』（昭和15年）

33. 小平権一『石黒忠篤』101～103頁。尚，加藤完治氏自身，筆者にくわしくこの時の事情を語った。

34. 長 幸男「高橋是清と危機＝転換期の財政政策」『日本経済思想史研究』221～223頁。

35. 橋本伝左衛門「満州農業移民の沿革」『満州農業移民十講』収録）21頁。

36. 拓務省拓務技師浅川其二「満洲農業移民の現況」同上102～103頁。
尚，分村の他に自由移民，青年移民などもあり，例えば，第五次移民採用者1000名についてみると，年齢は23～28歳が60％強，妻子なきもの67％，職業は，農業者86％，その他は大工，左官，石工，蹄鉄工等の特技者である。

37. 加藤完治「皇国農民の自覚と使命」『弥栄』第161号，昭和11年2月15日。

38. 加藤完治『日本農村教育』208頁。

39. 加藤完治「炉辺雑話」『弥栄』第161号。

40. 『日本農村教育』210～211頁。

41. 永雄策郎「満州農業移民に関する二三の弁妄」（『満洲農業移民十講』収録）39頁。

42. 「国境方面に於ける国防的建設に関する要望事項」（昭和13年12月10日，関東軍司令部）の「移民」の項に次のように記されている。「国境建設一般方針に準拠し，日本移民並に善良なる鮮人移民及原住民は之を国境接帯に於ても定着せしめ，一は以て銃後の培養力たらしむると共に他は以て各種の施策に活用し得しむ。之が為在来の無住地帯国境地方住民の処理に関する方策につき再検討を加う。」『現代史資料』（みすず書房）9．「日中戦争」2．787頁。

43. 第70議会説明資料「満洲帝国協和会に就て」（昭和12年1月9日，軍務局）によると，「日満の一徳一心の関係を持して満洲国は，民族協和を図り，之に依って王道楽土を建設し，道義に立脚した道徳的な国家を建設して行くと云うことであ

神教的自然宗教としての素朴な神道に神人帰一の信仰などというものがあったかどうか？　筧は普遍我の哲理と表現の哲理とをもって神道を説いているが，ヘーゲル派の絶対唯心論者と思える筧氏が，神々の背後に更に根本的の唯一の神があるとする時，それと多神教的神々との関係はどうなるか？　多神論を汎神論的に説こうともしているが，両者は究極的に相容れないものである。こうした素朴な多神論にとどまっている神道を世界第一の宗教と称揚することが出来るか？　更に，神々と人との関係について，八百万神は普通の人間なのが，超人間的存在なのか？　普通の人間と唯一神との間の半神だというなら，その存在を証明すべし。もし之が人間だとするなら，神々は吾々と同等のものとなる等の諸点である。

これに答えるものとして同誌第14巻第2号に筧 克彦は「古神道弁」を書いた。それに対して富永は更に，同誌第3号に「古神道疑義」を書いている。

17. 加藤『日本農村教育』103～104頁。

尚，加藤が主宰した雑誌『弥栄』（皇国農民団）の巻頭に毎号「大和民族の理想信仰」と題して，次のような文章がかかげられている。「大日本国民精神の結晶たる天照大御神の御延長に在す天皇を中心として国民全体が各自に其分担せる業務を完全に果しつつ本来の一心同体を発揚し，世界文明の建設に努力する事是であると信ずる」というのである。

18. 拙論「田沢義鋪の人間形成論」（国際基督教大学『教育研究』10号，1963年）56～67頁参照。

19. 『日本農村教育』133～134頁。

20. 山田次朗吉は直心影流第14代の有名な榊原鍵吉の愛弟子で榊原道場を継承した。『日本剣道史』その他の著書のある文武兼備といわれるすぐれた剣道家。東京商科大学剣道師範を30年間つとめた。『一徳斉山田次朗吉伝』（昭和6年）あり。

21. 加藤完治「皇国農民の自覚と使命」『弥栄』第161号（昭和11年2月15日）。

22. 加藤完治『滞欧所感』（昭和4年，一笑会刊）123頁。

23. 小平権一『石黒忠篤』96～98頁。

24. 加藤『日本農村教育』188頁。

25. 農林省農林事務官，遠藤三郎「農村経済更生と分村計画」，『満洲農業移民十講』（昭和13年，地人書館）111頁。

26. 加藤完治『滞欧所感』（昭和4年，一笑会）243～255頁。

27. 『日本農村教育』190頁。

28. 同上，191頁。

29. 橋本伝左衛門，加藤完治，永雄策郎監修『満州農学移民十講』（昭和13年，地人書館）2頁。橋本は加藤の移民推進活動について，更に，次のように述べている。当時，満鉄の附属地以外に日本人が踏出すことは出来ない。多くの日本人が行方不明となった。そこで，満州に送れないなら朝鮮でもよいというので，大正

ります。就中，民族協和による王道楽土の建設ということは実に前古未曽有の重大なる政策である…」『現代史資料』（みすず書房）9「日中戦争」2．741頁。

44．橋川文三「昭和超国家主義の諸相」『現代日本思想体系』31．（筑摩書房）。

45．『国策満洲開拓』（昭和15年，満洲移住協会）。

46．拓務省拓務局東亜第2課長山口乾治「満蒙開拓青年義勇軍」『日本文化』第56冊（昭和15年）。

47．全国開拓民自興会々長吉崎千秋「元満州開拓民及び満州開拓青少年義勇隊員並びにその指導者に対する国家処遇改善に関する陳情書」（昭和28年3月）。

48．拙著『天皇制思想と教育』155～158頁。

49．『農村に於ける塾風教育』（協調会昭和9年）149～180頁参照。
尚，キリスト教関係の農民福音学校は賀川豊彦，杉山元次郎らを始め，各地のキリスト者たちによって同時期に多数始められているが，それは，デンマークのグルンドウィッヒのキリスト教信仰に基いた国民高等学校の精神に刺激されたものであり，キリスト教の農民の中への土着を目ざす伝道運動の一形態でもあり，他の農民道場，塾風教育とは異質である。

50．司法省調査課『我国に於ける最近の国家主義乃至国家社会主義運動に就て』（昭和10年3月）。

51．経営伝習農場全国協議会『この途をゆく30年』（昭和39年11月20日）。

（この小論を書くにあたって，元インド大使那須皓氏，全国開拓民自興会々長吉崎千秋氏らにいろいろお話をうかがい，また，貴重な資料を多数拝借させていただいた。また，安城農林学校長飛田七蔵氏，拓殖大学図書館池田哲朗氏らにも資料を拝借させていただいた。竹内好氏，橋川文三氏らにも御親切な御配慮をいただいた。これらの諸氏の御好意に心から感謝するものである。）

A Study of Kanji Kato's Nationalism

——Movement for Farmers' Education and Agricultural Emigration to Manchuria——

(English Résumé)

Kiyoko Takeda Cho

Kanji Kato (1884—) was a unique educator of farmers who aspired to regenerate agricultural communities as the spiritual and material foundation of the nation. He was once converted to Christianity under the influence of an American missionary, but later he became an enthusiastic follower of Dr. Katsuhiko Kakei, a Shinto theorist and professor of law at Tokyo University. Kakei, having adopted Hegelian philosophy, developed a new interpretation of Shintoistic Nationalism. Thus it became Kato's mission to educate the farmers to Shintoistic Nationalism.

From another approach, Tadaatsu Ishiguro, a pioneering leader in the Ministry of Agriculture and Forestry, was seeking ways to solve the serious problem of farmers' poverty, which was aggravated by a continuous agricultural crisis in the 1930's. Ishiguro attempted to implement two policies. One was a kind of reform of the landlord system (which, however, only became realized by command of the U. S. Occupation Forces after World War II), and the other was a plan to develop an educational program for training leaders in rural communities. Ishiguro was planning to establish a Japan Higher Folk School, adopting the pattern of that developed in Denmark under the leadership of Nikolai F. S. Grundtvig, an outstanding Christian leader who worked to solve that country's ruralproblems.

Kato was invited to serve as the first principal of this school, which, first in Tomobe and later in Uchihara, in Ibaraki prefecture, became the center of education of farmers in Japan. Same

or similar kinds of folk schools with Kato's educational thought and method, spread all over the country. This educational movement in its early stage was expected to be like that in Denmark. It might have given the impression of sharing some of the humanistic and democratic sentiments of other new educational movements of the Taisho period, which were typically critical of the formalistic public school system (under direction of the Ministry of Education) and emphasized informal educational methods, pragmatic combining of "labor" and "education", and practical concern for social problems, etc. But in reality Kato's movement contributed to preparing, spreading and supporting the idea of Shintoistic Nationalism and fascistic ultra-nationalism in the thought pattern of the rural Japanese.

Kato, when he realized that the second and third sons of poor peasants had no land to cultivate, was convinced simply that land had to be found for them somewhere in the world, and Manchuria offered the best opportunity. He persuaded military authorities, as well as the government itself, to adopt an agricultural emigration policy under which 5,000,000 poor peasants were to be sent to Manchuria. After the Manchurian War in 1931, this program became national policy, and Kato's school became the center for training the emigrants to Manchuria. Later Kato proposed sending out young boys between the ages of 16 and 19, besides the adult emigrants. At the government's request, many schools all over Japan were forced to select the best ten in ability and health among their graduating students and to send them to the school in Uchihara. They were trained there, and later at branches in Manchuria, in both agricultural and military practices. Then they were sent out to the northern frontiers as kind of colonial troops……a total of more than 300,000. Many of these capable and healthy boys, living under inhuman conditions in a severe climate, with poor food and heavy labor, suffered illness or died. Later, at the end of World War II, more than 80,000 boys, women

and children were left behind by the Japanese troops and became tragic victims to the attacking Russians and Chinese.

This paper is an analytical study of Kato's Shintoistic Nationalism and the nature and role of his educational movement in the historical process of modern Japan. The content is as follows:

I. Preface……the purpose of this paper.

II. The Folk School Movement for "regeneration" of rural communities in the period of agricultural crisis.

III. Kanji Kato's Shintoistic Nationalism and his educational thought and method practiced and demonstrated through the Japan Higher Folk School Movement.

IV. Emigration of farmers and youth troops to Manchuria as the result and continuation of Kato's educational activities.

V. The significant nature and problems of Kato's nationalistic educational thought and movement in the history of educational thought in modern Japan.